

審査意見への対応を記載した書類（6月）（資料）

【目次】

【資料1】	大学院学則（補正後）	2
【資料2】	ディプロマ・ポリシー（補正後）	16
【資料3】	人材育成の概念図（新旧対照表）	17
【資料4】	カリキュラム・ポリシー（補正後）	18
【資料5】	アドミッション・ポリシー（補正後）	19
【資料6】	シラバス目次（補正後）	20
【資料7】	3つの人材養成のイメージ図（新旧対照表）	21
【資料8】	履修モデル（補正後・補正前）	22
【資料9】	地域リハビリテーションに関する授業科目（シラバス抜粋）	29
【資料10】	特別研究に関する授業科目（シラバス抜粋）	37
【資料11】	成績評価方法（新旧対照表）	65
【資料12】	研究計画書審査基準、論文審査基準及び最終試験基準（補正後・補正前）	69
【資料13】	履修指導及び研究指導の方法・スケジュール（補正後・補正前）	75
【資料14】	購入予定図書・電子媒体資料一覧（補正後・補正前）	77
【資料15】	追加アンケート調査結果・質問内容	83

大学院学則

(令和 4 年 4 月 1 日施行)

(案)

大阪河崎リハビリテーション大学

第 1 章 総 則

（目 的）

第 1 条 大阪河崎リハビリテーション大学大学院（以下「本大学院」という。）は、学部における広い教養並びに専門教育の上に、リハビリテーション関連領域の高度にして専門的な学術の理論及び応用を教授研究し、さらに進んで研究指導能力を養い、もって人類の健康と福祉の増進に寄与することを目的とする。

（自己点検及び評価等）

第 2 条 本大学院の目的を達成するために、教育研究活動等の状況について、自ら点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果について公表する。

2 前項の自己評価の結果について、学外者による検証を行うように努める。

3 本大学院は、教育研究活動等の状況について、自己評価及び第三者評価等の結果を、刊行物・広報物、ホームページ等において、情報提供するものとする。

4 前項の自己評価の方法等については、別に定める。

第 2 章 組織及び収容定員

（本大学院の課程並びに研究科及び専攻課程）

第 3 条 本大学院の課程は修士課程とし、次の研究科及び専攻を置く。

リハビリテーション研究科 リハビリテーション学専攻

（収容定員）

第 4 条 本大学院の入学定員及び収容定員は、次のとおりとする。

研究科・専攻	入学定員	収容定員	教育研究上の目的
リハビリテーション研究科・リハビリテーション学専攻	8名	16名	リハビリテーション関連領域の現状と課題，将来への展望を適切にとらえ，特に，リハビリテーション学において高い専門性と優れた実践力を持ち，かつ豊かな人間性と多職種との連携協働力を備え，リハビリテーション学及び関連領域における研究・教育・臨床実践の発展に寄与することのできる指導的人材を育成する。

(修業年限及び在学年限)

第5条 本大学院に置く修士課程の修業年限は，2年とする。

2 研究科は，学生が職業を有している等の事情により，前項に規定する標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し，課程を修了することを希望する旨を申し出たときは，学長の承認を得て，その計画的な履修を認めることができる。

3 本大学院には，休学期間を除いて4年を超えて在学することができない。ただし，前項の規定により，長期にわたる教育課程の履修を認められた者であっても，6年を超えて在学することができないものとする。

第3章 学年・学期及び休業日

(学年・学期・休業日)

第6条 学年，学期，休業日は，大阪河崎リハビリテーション大学学則(以下「大学学則」という。)第5条及び第6条の規定を準用する。

第 4 章 教育課程・履修方法等

(教育方法)

第 7 条 本大学院における教育は、授業科目の授業及び修士論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）により行うものとする。

(授業科目)

第 8 条 研究科が設置する授業科目，単位数及び履修方法等については，別表第 1 に定める。

(履修単位)

第 9 条 研究科の学生は，所定の期間に授業科目のうち 32 単位以上履修しなければならない。

(単位の基準)

第 10 条 授業科目の単位は，次の各号に定めるとおりとする。

(1)講義及び演習については，15 時間の授業をもって 1 単位とする。

(2)特別研究については，15 時間の授業をもって 1 単位とする。

(単位の認定)

第 11 条 授業科目の単位認定は，試験の成績又は研究の報告などにより科目担当者が行い，合格した科目については所定の単位を与える。

2 各授業科目の試験の成績は、100 点を満点として次の評価をもって表し、S、A、B 及び C を合格、F を不合格とする。

S (90 点以上)

A (80 点以上 90 点未満)

B (70 点以上 80 点未満)

C (60 点以上 70 点未満)

F (60 点未満)

(他大学大学院における授業科目の履修等)

第12条 学長は、教育上有益と認めるときには、他の大学院との協議に基づき学生が当該他大学院において履修した授業科目について修得した単位の内、10単位を限度として本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2 前項の規定は、学生が外国の大学院に留学する場合に準用する。

(入学前既修単位等の認定)

第13条 学生が本大学院に入学する以前に大学院又は他の大学院（外国の大学院を含む）において履修した授業科目について修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む）を学長が教育上有益と認めるときは、10単位を限度として本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2 前項により認定できる単位数は、前条において本大学院において修得したものと認定する単位数と合わせて10単位を超えないこととする。

第5章 入学・退学・留学及び休学

(入学時期)

第14条 本大学院の入学の時期は、学年の始めとする。ただし、第19条の規定により入学する者については、学期の始めとすることができる。

(入学資格)

第15条 本大学院に入学できる者は、次の各号の一に該当する者とする。

(1) 大学を卒業した者

(2) 学校教育法第104条第4項の規定により学士の学位を授与された者

- (3) 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者
- (4) 学校教育法施行規則第155条第1項第3号から第7号までの規定により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者
- (5) 本大学院において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22歳に達した者

(入学の出願)

第16条 本大学院に入学を志願する者は、本大学院所定の入学願書に所定の入学検定料及び書類を添えて願い出なければならない。

(入学者の選考)

第17条 前条の入学志願者については、別に定めるところにより選考を行う。

(入学手続及び入学の許可)

第18条 前条の選考の結果に基づき合格の通知を受けた者は、所定の期日までに、本大学院所定の書類を提出するとともに、所定の学生納付金を納付しなければならない。

2 学長は、前項の入学手続を完了した者に入学を許可する。

(転入学・再入学等)

第19条 学長は、本大学院に転入学または再入学することを志願する者があるときは、欠員のある場合に限り、選考により、相当年次に入学を許可することができる。

2 第1項の規定により転入学または入学を許可された者の既に修得した授業科目及び単位数の取扱い並びに在学すべき年数については、学長が決定する。

(留 学)

第 20 条 外国の大学院等で修学することを志願する者は、学長に届け出て留学することができる。

2 前項の規定により留学して修得した単位の取扱いについては学長が定める。

3 第 1 項の規定により留学した期間は、第 4 条に規定する在学期間に算入することができる。

(退 学)

第 21 条 病気その他のやむを得ない理由により退学しようとする者は、学長の許可を受けなければならない。

(休 学)

第 22 条 疾病その他やむを得ない理由により、引き続き 2 か月以上修学することができない者は、学長に届け出て休学することができる。

2 疾病を理由とする休学届には、医師の診断書を添付しなければならない。

3 学長は、疾病その他の理由により修学することが適当でないと認められる者に対して、休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第 23 条 休学の期間は、1 年を超えることができない。ただし、特別の理由があると認める場合は、引き続き更に 1 年まで延長することができる。

2 休学の期間は、通算して 2 年を超えることができない。

3 休学の期間は、第 5 条第 3 項の在学年限に算入しない。

(復 学)

第 24 条 休学期間が満了した者は、学長の許可を得て、復学することができる。

2 休学期間中にその理由が消滅した者は，学長の許可を得て，復学することができる。

(転 学)

第 25 条 本大学院から他の大学院に転学しようとする者は，学長に届け出なければならない。

(除 籍)

第 26 条 次の各号のいずれかに該当する者があるときは，学長が除籍する。

- (1) 在学の期間，又は休学の期間を超えた者
- (2) 授業料の納付を怠り，督促してもなお納付しない者
- (3) 病気その他の理由により，成業の見込みがない者
- (4) 死亡した者，又は行方不明となった者

第 6 章 課程の修了及び学位授与

(修了の要件)

第 27 条 学長は，本大学院に 2 年以上在学し，第 10 条に定める単位を修得し，かつ，必要な研究指導を受けたうえ，本大学院の行う修士論文の審査及び最終試験に合格した者に対し，修士課程の修了を認定する。

2 学位を授与するための論文審査，最終試験等の実施に必要な事項については，別に定める。

(学 位)

第 28 条 学長は，前条第 1 項の規定により修士課程の修了を認定した者に対し，修士（リハビリテーション学）の学位を授与する。

第 7 章 検定料・入学金・授業料及びその他の費用

(納付金)

第 29 条 検定料，入学金，授業料及びその他の納付金の額は，別表第 2 に定めるとおりとする。

(納入義務)

第 30 条 学生，科目等履修生，特別聴講学生，研究生及び外国人留学生は，授業料等を別表第 2 に定める期日までに納めなければならない。ただし，特別の事情があると認められる者は，延納を認めることがある。

2 停学，休学及び復学の場合の授業料等と納付した授業料等については，大学学則第 29 条及び第 30 条の規定を準用する。

第 8 章 運営組織

(研究科委員会)

第 31 条 研究科における教育研究上の重要な事項を審議するため，研究科委員会を置く。

2 研究科委員会は学長，研究科長及び研究科の教授をもって組織する。

3 前項の規定にかかわらず，学長が必要と認めたときは，研究科委員会に，その他の教職員を加えることができる。

4 その他，必要のあるときは，学長は，研究科委員会の構成員以外の者に対して，研究科委員会の会議に出席し，意見を陳述させることができる。

5 学長は，教育研究に関する次の各号に掲げる事項について決定を行うに当たり，研究科委員会の意見を聴くものとする。

(1) 学生の入学及び課程の修了

(2) 学位の授与

- (3) 前 2 号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、研究科委員会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの
- 6 研究科委員会は、前項に規定するもののほか、学長がつかさどる教育研究に関する事項について、意見を述べることができる。
- 7 研究科委員会は、第 5 項に規定するもののほか、学長の指示する事項に対し、速やかに意見を述べなければならない。
- 8 本条に規定するもののほか、研究科委員会に関し必要な事項は、学長が別に定める。

(学長への委任)

第 32 条 この規則に定めるもののほか、本大学院の管理運営に関し必要な事項は、学長が別に定める。

(研究科長)

第 33 条 大学院に研究科長を置くことができる。

2 研究科長は、学長の命を受け、研究科内の教育及び研究に関する校務をつかさどる。

第 9 章 科目等履修生・特別聴講学生・外国人留学生及び 研究生

(科目等履修生)

第 34 条 学長は、本大学院の一又は複数の授業科目の履修を志願する者があるときは、科目等履修生として許可することができる。

2 科目等履修生には、単位を与えることができる。

3 科目等履修生の学費は別表第 3 のとおりとする。

4 前 2 項に規定するもののほか、科目等履修生に必要な事項は、別に定める。

(聴講生)

第 35 条 学長は、他の大学院の学生で本大学院の一又は複数の授業科目の履修を志願する者があるときは、当該大学院との協議に基づき、聴講生として許可することができる。

2 前項に規定するもののほか、聴講生に必要な事項は、別に定める。

(外国人留学生)

第 36 条 学長は、外国人で、大学院において教育を受ける目的をもって入国し、本大学院に入学することを志願するものがあるときは、選考の上、外国人留学生として入学を許可することができる。

2 前項に規定するもののほか、外国人留学生に必要な事項は、別に定める。

(研究生)

第 37 条 学長は、本大学院以外の者で本大学院において特定の専門事項について研究しようとする者があるときは、本大学院の教育又は研究に支障のない限り、選考の上、研究生として受け入れることができる。

2 研究生の研究期間は、原則として 1 年以内とする。

3 前項の研究期間を超えて、なお研究を継続しようとする場合は、事情により許可することができる。

4 前 3 項に規定するもののほか、研究生に必要な事項は、別に定める。

第 10 章 賞 罰

(表 彰)

第 38 条 学長は、表彰に値する行為のあったときは、その者を表彰することができる。

2 学生の表彰に関して必要な事項は、別に定める。

(懲戒)

第 39 条 学長は、この規則その他本大学院の定める諸規程に違反し、又は学生としての本分に反する行為をした学生を懲戒することができる。

2 懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。

3 前項の退学は、次の各号のいずれかに該当する者に対して行う。

(1) 性行不良で改善の見込みがないと認められる者

(2) 学力劣等で成業の見込みのないと認められる者

(3) 正当な理由なくして出席が常でない者

(4) 本大学院の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者

4 学生の懲戒に関して必要な事項は、別に定める。

第 11 章 厚生及び保健

(厚生及び保健)

第 40 条 本学に厚生及び保健に関する施設を置く。

(健康診断)

第 41 条 教職員及び学生のため、毎年 1 回以上健康診断を行う。

附 則

この学則は、令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

別表第1 授業科目（第8条関係）

科目区分	授業科目名	配当年次	単位数		備考	
			必修	選択		
共通科目	英語文献講読	1 前	2		共通科目から6科目12単位を必修	
	医学英語特論	1 前	2			
	リハビリテーション疫学・統計学特論	1 前	2			
	認知機能・認知予備力特論	1 前	2			
	地域リハビリテーションリーダー論	1 後	2			
	地域支援学特論	1 後	2			
支持科目	認知リハビリテーション学概論	1 前		2	支持科目から8単位以上を選択必修	
	認知リハビリテーション学研究方法論	1 前		2		
	リハビリテーション教育学特論	1 後		2		
	リハビリテーション教育学演習	1 後		2		
	地域社会福祉制度特論	1 前		2		
	地域ケアマネジメント特論	1 前		2		
	心のサイエンスと臨床心理学	1 後		2		
	認知機能解析学	1 後		2		
	運動機能解析学	1 後		2		
	生活行為解析学	1 後		2		
	コミュニケーション解析学	1 後		2		
	園芸療法補完代替医療	1 後		2		
	精神神経解剖学特論	1 後		2		
専門科目	運動機能科学領域	運動機能リハビリテーション学特論	1 前		2	領域を選択し、専門科目から4単位、特別研究8単位を選択必修
		運動機能リハビリテーション学演習	1 後		2	
		運動機能科学特別研究	1～2 通		8	
	生活行為科学領域	生活行為リハビリテーション学特論	1 前		2	
		生活行為リハビリテーション学演習	1 後		2	
		生活行為科学特別研究	1～2 通		8	
	コミュニケーション	コミュニケーションリハビリテーション学特論	1 前		2	

科学領域	コミュニケーションリハビリテーション学演習	1 後		2
	コミュニケーション科学特別研究	1～2 通		8

別表第 2 学生納付金（第 29 条・第 30 条関係）

項目	金額	備考
入学検定料	30,000 円	入学検定時のみ
入学金	300,000 円	入学時のみ
授業料	600,000 円	前後期分納
教育充実費	145,000 円	年額
納入期日	前期 4 月 26 日 後期 10 月 26 日 （納入期日が金融機関の休業日にあたる場合は、その翌営業日とする）	

別表第 3 科目等履修生納付金（第 34 条関係）

項目	金額	備考
登録料	20,000 円	更新の場合は不要
授業料	20,000 円	1 単位につき

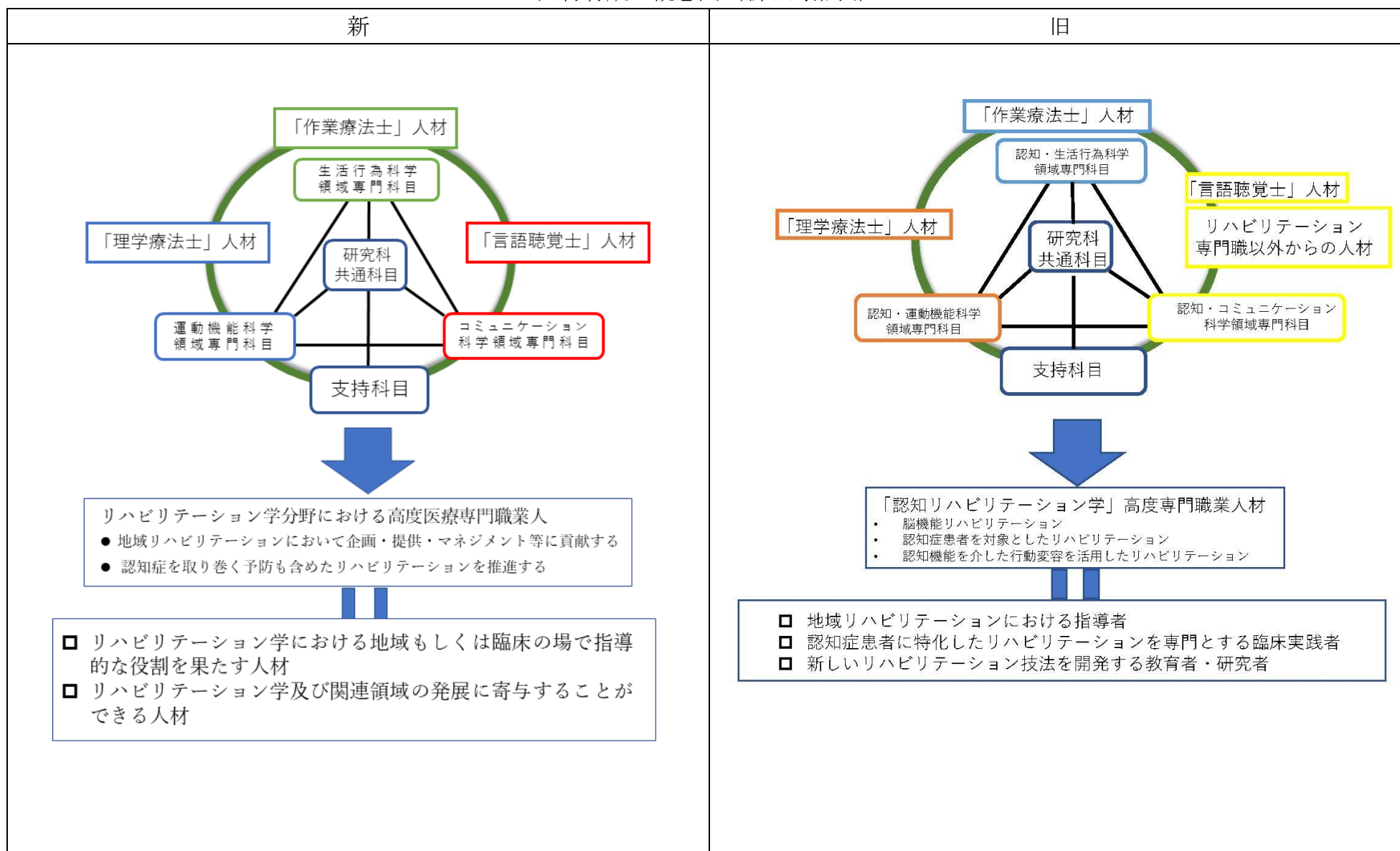
【資料2】

大阪河崎リハビリテーション大学大学院 ディプロマ・ポリシー

本学大学院のディプロマ・ポリシーを以下のように定める。

1. リハビリテーション学分野における高度医療専門職業人として、リハビリテーションの発展に寄与することができる。
2. リハビリテーション学分野における幅広い学識と倫理観を有し、地域もしくは臨床の場で指導的な役割を果たすことができる。
3. 地域リハビリテーションにおいて企画・提供・マネジメント等に貢献することができる。
4. 認知症を取り巻く予防も含めたリハビリテーションや支援を推進することができる。
5. 修得した専門知識を教育・研究・臨床に生かし、リハビリテーション学及び関連領域の発展に寄与することができる。

人材育成の概念図（新旧対照表）



大阪河崎リハビリテーション大学大学院
カリキュラム・ポリシー

1. 本研究科の研究領域として、「運動機能科学領域」、「生活行為科学領域」、「コミュニケーション科学領域」の3つの領域を設けて、これらの領域ごとに、教育・研究を推進できるカリキュラムを編成する。
2. 人の健康増進や生活向上に役立つ基礎的要素を涵養して新たなリハビリテーション学の追求を図るうえで必要となる学術活動の基礎を習得できるように、特別研究、専門科目群とは別に、必修科目として「共通科目」6科目を配置する。
3. 本研究科では、地域リハビリテーションの実践において活躍できる人材の養成を目指していることを踏まえ、「地域リハビリテーションリーダー論」及び「地域支援学特論」を全領域に共通の必修科目とする。
4. 認知機能及び認知症に関する最新の知識を教授するために、「認知機能・認知予備力特論」を共通科目に配置する。
5. 理学療法士、作業療法士、言語聴覚士という異なる学問的背景を有する学生の要請に応じて、リハビリテーション学関連の基礎的要素を涵養するために、幅広い関連領域から精選した選択科目として「支持科目」13科目を配置する。
6. 領域ごとの「専門科目」については、各領域の特論と演習を組み合わせ、基礎と応用の2段階の内容で科目設定を行い、実践課題を研究テーマとしての特別研究へとつなげるようなカリキュラムを編成する。
7. ディプロマ・ポリシーに掲げた知識と技能を修得するために、選択する領域ごとにコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせることが可能なカリキュラム編成を行う。
8. 社会人であるリハビリテーション専門職者の学修と仕事の両立を可能にするために、夜間、土曜日の開講を行い、2年コースと3年コースのどちらかを選択できる環境を整える。

【資料 5】

大阪河崎リハビリテーション大学大学院 アドミッション・ポリシー

本研究科では、1、2、3の全てを満たした上で、4、5、6のいずれかに相当する人を受け入れる。

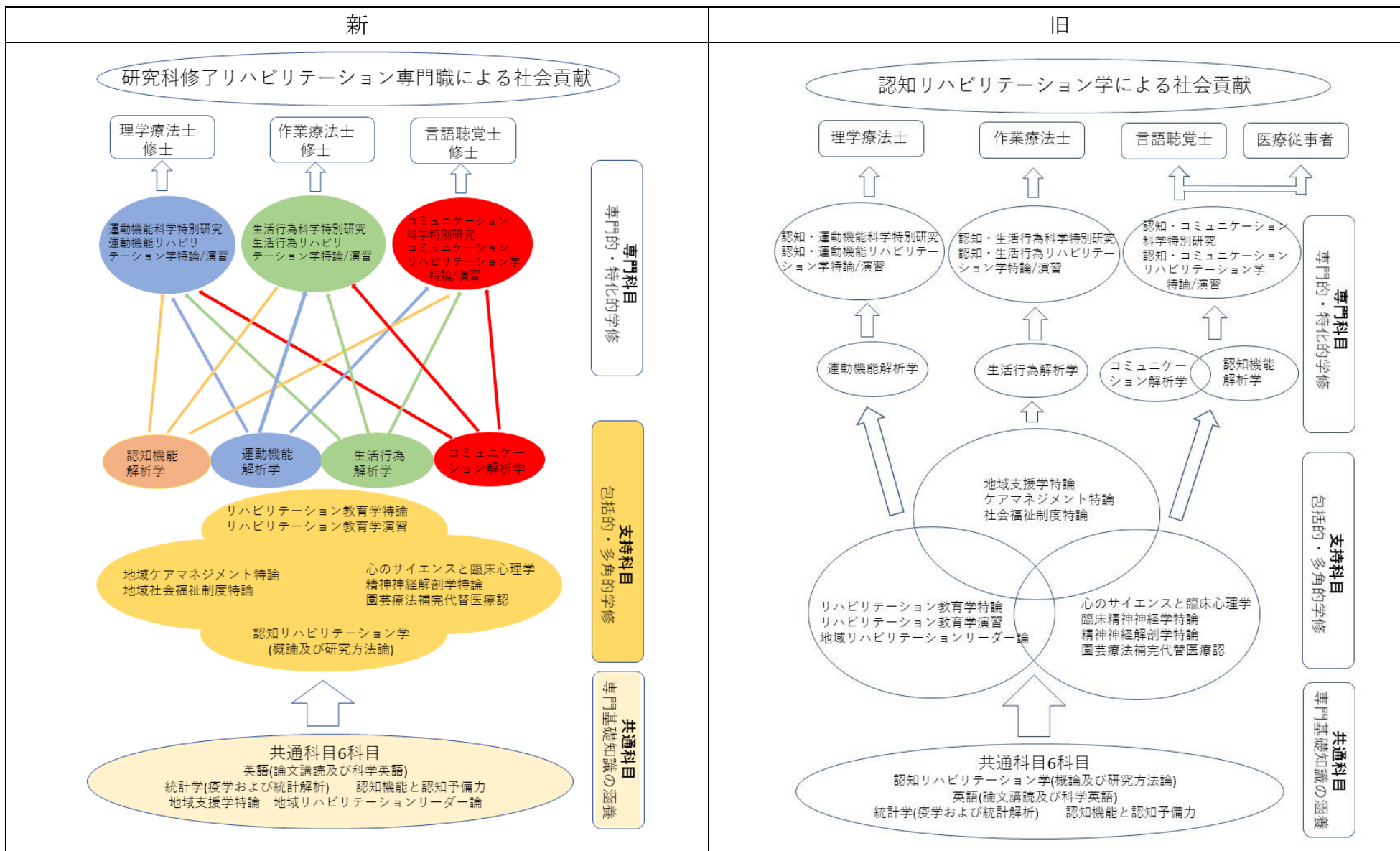
1. 理学療法士、作業療法士、あるいは、言語聴覚士の資格を有する人
2. 英語論文を理解するために必要となる一定の英語力を有しており、本研究科が課す英語の入学試験に合格した人
3. 地域リハビリテーションに関するエビデンスの構築や次世代のリハビリテーション・サービスのあり方を積極的に考え、実践につなげることができる人
4. チーム医療の中心的役割を担う高度医療専門職業人として活躍する意欲を持つ人
5. リハビリテーション学の発展に貢献する教育・研究者を目指す意欲のある人
6. 地域でリハビリテーション療法士として働きながら、問題意識を明確に有し、自ら問題解決を図る意識を高くもっている社会人

※ 社会人とは、地域の保健医療機関や介護施設などの職場に3年以上在籍しているリハビリテーション専門職とする。

大阪河崎リハビリテーション大学大学院 シラバス 目次

科目名	ポリシー該当項目	ページ
英語文献講読	CP：②⑦ DP：①②⑤	2
医学英語特論	CP：②⑦ DP：①②⑤	4
リハビリテーション疫学・統計学特論	CP：②⑦ DP：①②⑤	6
認知機能・認知予備力特論	CP：②④⑦ DP：①②④	8
地域リハビリテーションリーダー論	CP：②③⑦ DP：①②③	10
地域支援学特論	CP：②③⑦ DP：①②③	12
認知リハビリテーション学概論	CP：⑤⑦ DP：①②④	14
認知リハビリテーション学研究方法論	CP：⑤⑦ DP：④⑤	16
リハビリテーション教育学特論	CP：⑤⑦ DP：②⑤	18
リハビリテーション教育学演習	CP：⑤⑦ DP：②⑤	20
地域社会福祉制度特論	CP：⑤⑦ DP：②③	22
地域ケアマネジメント特論	CP：⑤⑦ DP：②③	24
心のサイエンスと臨床心理学	CP：⑤⑦ DP：②④	26
認知機能解析学	CP：⑤⑦ DP：①②④	28
運動機能解析学	CP：⑤⑦ DP：①②	30
生活行為解析学	CP：⑤⑦ DP：①②	32
コミュニケーション解析学	CP：⑤⑦ DP：①②	34
園芸療法補完代替医療	CP：⑤⑦ DP：①②	36
精神神経解剖学特論	CP：⑤⑦ DP：①②	38
運動機能リハビリテーション学特論	CP：①⑥⑦ DP：①②③④⑤	40
運動機能リハビリテーション学演習	CP：①⑥⑦ DP：①②③④⑤	42
運動機能科学特別研究	CP：①⑦ DP：①②③④⑤	44
生活行為リハビリテーション学特論	CP：①⑥⑦ DP：①②③④⑤	54
生活行為リハビリテーション学演習	CP：①⑥⑦ DP：①②③④⑤	56
生活行為科学特別研究	CP：①⑦ DP：①②③④⑤	58
コミュニケーションリハビリテーション学特論	CP：①⑥⑦ DP：①②③④⑤	66
コミュニケーションリハビリテーション学演習	CP：①⑥⑦ DP：①②③④⑤	68
コミュニケーション科学特別研究	CP：①⑦ DP：①②③④⑤	70

3つの人材養成のイメージ図（新旧対照表）



大阪河崎リハビリテーション大学大学院

リハビリテーション研究科リハビリテーション学専攻履修モデル

(1)運動機能科学領域

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	計
共通科目	英語文献講読	●2		
	医学英語特論	●2		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●2		
	認知機能・認知予備力特論	●2		
	地域リハビリテーションリーダー論	●2		
	地域支援学特論	●2		
	共通科目 計	12	0	12
支持科目	認知リハビリテーション学概論	○2		
	認知リハビリテーション学研究方法論			
	リハビリテーション教育学特論	必要に応じて		
	リハビリテーション教育学演習	必要に応じて		
	地域社会福祉制度特論			
	地域ケアマネジメント特論	○2		
	心のサイエンスと臨床心理学			
	認知機能解析学	○2		
	運動機能解析学	○2		
	生活行為解析学			
	コミュニケーション解析学			
	園芸療法補完代替医療			
	精神神経解剖学特論			
支持科目 計	8	0	8	
専門科目	運動機能リハビリテーション学特論	○2		
	運動機能リハビリテーション学演習	○2		
	運動機能科学特別研究		○8	
	生活行為リハビリテーション学特論			
	生活行為リハビリテーション学演習			
	生活行為科学特別研究			
	コミュニケーションリハビリテーション学特論			
	コミュニケーションリハビリテーション学演習			
	コミュニケーション科学特別研究			
専門科目 計	4	8	12	
合計		24	8	32
期待される能力				
1. 脳機能リハビリテーション、認知症の病態・症状と認知症患者に対するリハビリテーション、認知機能を介した行動変容についての知見を理解し、それらを理学療法士として臨床場面において活用できる。				
2. 地域リハビリテーションの現場で理学療法士として指導的立場で活躍できる				
3. 認知症患者に対して理学療法士として専門的リハビリテーション・サービスを行うことができる				
4. 運動機能リハビリテーション学を応用し、その発展に貢献できる				
修了後の主な進路				
病院、診療所、介護施設、福祉施設などの臨床現場に加えて、研究・教育機関での専門職				

大阪河崎リハビリテーション大学大学院
 リハビリテーション研究科リハビリテーション学専攻履修モデル
 (2)生活行為科学領域

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	計
共通科目	英語文献講読	●2		
	医学英語特論	●2		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●2		
	認知機能・認知予備力特論	●2		
	地域リハビリテーションリーダー論	●2		
	地域支援学特論	●2		
	共通科目 計	12	0	12
支持科目	認知リハビリテーション学概論	○2		
	認知リハビリテーション学研究方法論			
	リハビリテーション教育学特論	必要に応じて		
	リハビリテーション教育学演習	必要に応じて		
	地域社会福祉制度特論	○2		
	地域ケアマネジメント特論	○2		
	心のサイエンスと臨床心理学			
	認知機能解析学			
	運動機能解析学			
	生活行為解析学	○2		
	コミュニケーション解析学			
	園芸療法補完代替医療			
	精神神経解剖学特論			
支持科目 計	8	0	8	
専門科目	運動機能リハビリテーション学特論			
	運動機能リハビリテーション学演習			
	運動機能科学特別研究			
	生活行為リハビリテーション学特論	○2		
	生活行為リハビリテーション学演習	○2		
	生活行為科学特別研究		○8	
	コミュニケーションリハビリテーション学特論			
	コミュニケーションリハビリテーション学演習			
	コミュニケーション科学特別研究			
専門科目 計	4	8	12	
合計		24	8	32
期待される能力				
<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳機能リハビリテーション、認知症の病態・症状と認知症患者に対するリハビリテーション、認知機能を介した行動変容についての知見を理解し、それらを実践者として臨床場面において活用できる。 2. 地域リハビリテーションの現場で実践者として指導的立場で活躍できる 3. 認知症患者に対して実践者として専門的リハビリテーション・サービスを行うことができる 4. <u>生活行為リハビリテーション学</u>を応用し、その発展に貢献できる 				
修了後の主な進路				
病院、診療所、介護施設、福祉施設などの臨床現場に加えて、研究・教育機関での専門職				

大阪河崎リハビリテーション大学大学院
 リハビリテーション研究科リハビリテーション学専攻履修モデル
 (3) コミュニケーション科学領域

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	計
共通科目	英語文献講読	●2		
	医学英語特論	●2		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●2		
	認知機能・認知予備力特論	●2		
	地域リハビリテーションリーダー論	●2		
	地域支援学特論	●2		
	共通科目 計	12	0	12
支持科目	認知リハビリテーション学概論			
	認知リハビリテーション学研究方法論			
	リハビリテーション教育学特論	必要に応じて		
	リハビリテーション教育学演習	必要に応じて		
	地域社会福祉制度特論	○2		
	地域ケアマネジメント特論			
	心のサイエンスと臨床心理学	○2		
	認知機能解析学	○2		
	運動機能解析学			
	生活行為解析学			
	コミュニケーション解析学	○2		
	園芸療法補完代替医療			
	精神神経解剖学特論			
支持科目 計	8	0	8	
専門科目	運動機能リハビリテーション学特論			
	運動機能リハビリテーション学演習			
	運動機能科学特別研究			
	生活行為リハビリテーション学特論			
	生活行為リハビリテーション学演習			
	生活行為科学特別研究			
	コミュニケーションリハビリテーション学特論	○2		
	コミュニケーションリハビリテーション学演習	○2		
	コミュニケーション科学特別研究		○8	
専門科目 計	4	8	12	
合計		24	8	32
期待される能力				
1. <u>地域社会福祉制度について十分な知識を有し</u> 地域リハビリテーションにおいて言語聴覚士として活躍できる。 2. <u>神経精神疾患の病態を理解するための心理過程に対する洞察力を備えた</u> 言語聴覚士として地域リハビリテーションの現場において指導的立場で活躍できる 3. <u>認知症患者に対して</u> 言語聴覚士として専門的リハビリテーション・サービスを行うことができる 4. <u>コミュニケーション学を応用し、その発展に貢献</u> できる				
修了後の主な進路				
病院、診療所、介護施設、福祉施設などの臨床現場に加えて、研究・教育機関での専門職				

大阪河崎リハビリテーション大学大学院

リハビリテーション研究科認知リハビリテーション学専攻履修モデル

(1) 認知・運動機能科学領域

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	1年
共通科目	認知リハビリテーション学概論	●1		
	認知リハビリテーション学研究方法論	●1		
	英語文献講読	●1		
	医学英語特論	●1		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●1		
	認知機能・認知予備力特論	●1		
	共通科目 計	6	0	6
支持科目	地域リハビリテーションリーダー論	○2		
	地域支援学特論	○2		
	リハビリテーション教育学特論	○2		
	リハビリテーション教育学演習	○2		
	社会福祉制度特論			
	ケアマネジメント特論	○2		
	心のサイエンスと臨床心理学			
	認知機能解析学			
	運動機能解析学	○2		
	生活行為解析学			
	コミュニケーション解析学			
	園芸療法補完代替医療			
	臨床精神神経学特論			
	精神神経解剖学特論			
支持科目 計	12	0	12	
専門科目	認知・運動機能リハビリテーション学特論	○2		
	認知・運動機能リハビリテーション学演習	○2		
	認知・運動機能科学特別研究		○8	
	認知・生活行為リハビリテーション学特論			
	認知・生活行為リハビリテーション学演習			
	認知・生活行為科学特別研究			
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学特論			
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学演習			
認知・コミュニケーション科学特別研究				
専門科目 計	4	8	12	
合計	22	8	30	
期待される能力				
5. 脳機能リハビリテーション、認知症の病態・症状と認知症患者に対するリハビリテーション、認知機能を介した行動変容についての知見を理解し、それらを理学療法士として臨床場面において活用できる。				
6. 地域リハビリテーションの現場で理学療法士として指導的立場で活躍できる				
7. 認知症患者に対して理学療法士として専門的リハビリテーション・サービスを行うことができる				
8. 認知・運動機能リハビリテーション学を応用し、その発展に貢献できる				
修了後の主な進路				
病院、診療所、介護施設、福祉施設などの臨床現場に加えて、研究・教育機関での専門職				

大阪河崎リハビリテーション大学大学院
 リハビリテーション研究科認知リハビリテーション学専攻履修モデル
 (2) 認知・生活行為科学領域

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	1年
共通科目	認知リハビリテーション学概論	●1		
	認知リハビリテーション学研究方法論	●1		
	英語文献講読	●1		
	医学英語特論	●1		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●1		
	認知機能・認知予備力特論	●1		
	共通科目 計	6	0	6
支持科目	地域リハビリテーションリーダー論	○2		
	地域支援学特論	○2		
	リハビリテーション教育学特論	○2		
	リハビリテーション教育学演習	○2		
	社会福祉制度特論			
	ケアマネジメント特論	○2		
	心のサイエンスと臨床心理学			
	認知機能解析学			
	運動機能解析学			
	生活行為解析学	○2		
	コミュニケーション解析学			
	園芸療法補完代替医療			
	臨床精神神経学特論			
	精神神経解剖学特論			
支持科目 計	12	0	12	
専門科目	認知・運動機能リハビリテーション学特論			
	認知・運動機能リハビリテーション学演習			
	認知・運動機能科学特別研究			
	認知・生活行為リハビリテーション学特論	○2		
	認知・生活行為リハビリテーション学演習	○2		
	認知・生活行為科学特別研究		○8	
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学特論			
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学演習			
	認知・コミュニケーション科学特別研究			
専門科目 計	4	8	12	
合計		22	8	30
期待される能力				
4. 脳機能リハビリテーション、認知症の病態・症状と認知症患者に対するリハビリテーション、認知機能を介した行動変容についての知見を理解し、それらを作業療法士として臨床場面において活用できる。				
5. 地域リハビリテーションの現場で作業療法士として指導的立場で活躍できる				
6. 認知症患者に対して作業療法士として専門的リハビリテーション・サービスを行うことができる				
7. 認知・生活行為リハビリテーション学を応用し、その発展に貢献できる				
修了後の主な進路				
病院、診療所、介護施設、福祉施設などの臨床現場に加えて、研究・教育機関での専門職				

大阪河崎リハビリテーション大学大学院
 リハビリテーション研究科認知リハビリテーション学専攻履修モデル
 (3) 認知・コミュニケーション科学領域 言語聴覚士を対象

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	1年
共通科目	認知リハビリテーション学概論	●1		
	認知リハビリテーション学研究方法論	●1		
	英語文献講読	●1		
	医学英語特論	●1		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●1		
	認知機能・認知予備力特論	●1		
	共通科目 計	6	0	6
支持科目	地域リハビリテーションリーダー論	○2		
	地域支援学特論			
	リハビリテーション教育学特論	○2		
	リハビリテーション教育学演習			
	社会福祉制度特論	○2		
	ケアマネジメント特論			
	心のサイエンスと臨床心理学	○2		
	認知機能解析学	○2		
	運動機能解析学			
	生活行為解析学			
	コミュニケーション解析学	○2		
	園芸療法補完代替医療			
	臨床精神神経学特論			
	精神神経解剖学特論			
支持科目 計	12	0	12	
専門科目	認知・運動機能リハビリテーション学特論			
	認知・運動機能リハビリテーション学演習			
	認知・運動機能科学特別研究			
	認知・生活行為リハビリテーション学特論			
	認知・生活行為リハビリテーション学演習			
	認知・生活行為科学特別研究			
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学特論	○2		
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学演習	○2		
	認知・コミュニケーション科学特別研究		○8	
専門科目 計	4	8	12	
合計		22	8	30
期待される能力				
4. <u>脳機能リハビリテーション、認知症の病態・症状と認知症患者に対するリハビリテーション、認知機能を介した行動変容についての知見を理解し、それらを言語聴覚士として臨床場面において活用できる。</u>				
5. <u>地域リハビリテーションの現場で言語聴覚士として指導的立場で活躍できる</u>				
6. <u>認知症患者に対して言語聴覚士として専門的リハビリテーション・サービスを行うことができる</u>				
7. <u>認知・コミュニケーション学を応用し、その発展に貢献できる</u>				
修了後の主な進路				
病院、診療所、介護施設、福祉施設などの臨床現場に加えて、研究・教育機関での専門職				

大阪河崎リハビリテーション大学大学院

リハビリテーション研究科認知リハビリテーション学専攻履修モデル

(4) 認知・コミュニケーション科学領域 非リハビリテーション専門職を対象

履修科目		履修年次・単位数		
		1年	2年	1年
共通科目	認知リハビリテーション学概論	●1		
	認知リハビリテーション学研究方法論	●1		
	英語文献講読	●1		
	医学英語特論	●1		
	リハビリテーション疫学・統計学特論	●1		
	認知機能・認知予備力特論	●1		
	共通科目 計	6	0	6
支持科目	地域リハビリテーションリーダー論			
	地域支援学特論			
	リハビリテーション教育学特論			
	リハビリテーション教育学演習			
	社会福祉制度特論	○2		
	ケアマネジメント特論			
	心のサイエンスと臨床心理学	○2		
	認知機能解析学	○2		
	運動機能解析学			
	生活行為解析学			
	コミュニケーション解析学	○2		
	園芸療法補完代替医療			
	臨床精神神経学特論	○2		
	精神神経解剖学特論	○2		
支持科目 計	12	0	12	
専門科目	認知・運動機能リハビリテーション学特論			
	認知・運動機能リハビリテーション学演習			
	認知・運動機能科学特別研究			
	認知・生活行為リハビリテーション学特論			
	認知・生活行為リハビリテーション学演習			
	認知・生活行為科学特別研究			
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学特論	○2		
	認知・コミュニケーションリハビリテーション学演習	○2		
	認知・コミュニケーション科学特別研究		○8	
専門科目 計	4	8	12	
合計		22	8	30
<p>1. <u>脳機能リハビリテーション、認知症の病態・症状と認知症患者に対するリハビリテーション、認知機能を介した行動変容についての知見を理解し、それらを専門職として職業において活用できる。</u></p> <p>2. <u>社会福祉の諸制度を理解し、専門職としての職業に活用できる</u></p> <p>3. <u>認知機能の評価解析ができ、精神機能と心理学的反応の意味を理解する</u></p> <p>4. <u>認知・コミュニケーション学を応用し、その発展に貢献できる</u></p>				
<p>修了後の主な進路</p> <p>リハビリテーション専門職と協働する実地臨床家、行政職、教育職、研究職等</p>				

【資料9】

科目No.	MCS05-1R	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	地域リハビリテーションリーダー論	担当教員 E-Mail	寺山 久美子		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	共通科目		必修	2単位	後期(30h)
授業概要	<p>地域リハビリテーションの主たる支援専門職である療法士は、障害の回復維持予防をはじめ、健康寿命の延伸・介護予防・終末期のQOL向上等に寄与する役割を持つ。また、その対象は障害者や障害児、認知症者、難病患者ばかりでなく、高齢により健康不安のある一般住民等へと拡大している。活動の場も在宅地域生活を前提とした対象者の入院時からの病院リハビリテーションプログラム、退院後のデイケア・デイサービスあるいは訪問リハビリテーション等の在宅プログラム、老人保健施設や特別養護老人ホーム等の施設リハビリテーションプログラム、障害児への特別支援学校や通園施設への療育プログラム、障害者のための就労支援プログラム、一般企業への支援プログラム等と広い守備範囲を持つ。</p> <p>本科目を通して、大学院生は地域リハビリテーションの包括的な理解を深め、また地域リハビリテーションに必要なリハビリテーションマネジメントの企画運営と多職種連携による介入とリハビリテーション専門職としてのリーダーシップのあり方を整理し、さらに地域リハビリテーションにおける各種事例を通して実際の概要を学修する。</p>				
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域ケアシステムと地域リハビリテーションの現状と課題を説明できる 2. リーダーシップ、リーダーに必要とされる要件について説明できる 3. 地域における健康延伸・介護予防・生活期リハビリテーション・障害児支援等におけるリハ職のマネジメント・リーダーシップを説明できる 4. 「我が町の地域包括ケアシステム・地域リハ」の現状・あるべき姿を描くことができる 5. 地域リハに関する実践事例を紹介・評価することができる 				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	地域とは、地域リハとは、	本授業のオリエンテーション		寺山 久美子	
2	地域包括ケアシステムと地域リハビリテーション	地域包括ケアシステムの概要と現状、地域リハビリテーションの現状と役割について大東市等の事例を学ぶ。		逢坂 伸子	
3	地域リハにおけるリーダーシップのあり方と役割を考える	リーダーシップやリーダーの資格など地域リハにおけるマネジメント・リーダーシップについて学ぶ。		寺山 久美子	
4	地域リハの歴史的展開（国内外）	国の内外の地域リハの展開を文献等から学ぶ。		寺山 久美子	
5	障害児療育と地域リハマネジメント	左記テーマを職能団体、企業等における実践例から学ぶ。		関本 充史	
6	障害者就労支援と地域リハマネジメント	左記テーマを職能団体・企業等における実践例から学ぶ。		関本 充史	
7	地域リハを支える組織・法・制度の現状と課題、等	左記テーマを総体的に整理した後、大東市の事例で検証する。		逢坂 伸子	
8	地域リハマネジメントのあり方（健康延伸期・介護予防期・生活期・終末期）	左記テーマを講師の実践経験をもとに検証し、あるべき方向を知る。		伊藤 隆夫	

9	健康延伸支援とリハマネジメン トの管理運営	左記テーマを貝塚市での実践をもとに学ぶ。	今岡 真和	
10	介護予防支援とリハマネジメン トの管理運営	左記テーマを貝塚市での実践をもとに学ぶ。	今岡 真和	
11	生活期・終末期支援とリハマネジ メンの管理運営	左記テーマを回復期リハ・訪問リハの実践をも とに学ぶ。	伊藤 隆夫	
12	地域におけるリハマネジメンの 手法	左記テーマを、介護予防や認知症事例を中心に 紹介する。	今岡 真和	
13	地域リハビリテーションの視点か らの地域組織づくり	左記テーマを「成功例・失敗例」を紹介し、「ど うすればうまくいくか」を探る。	今岡 真和	
14	地域リハビリテーションリーダー を考える（1）	各学生があらかじめ調べてきた「わがまちの地 域リハ」を上記講義の視点から論議する。	寺山 久美子・今岡 真和・伊藤 隆夫・ 逢坂 伸子・関本 充史	
15	地域リハビリテーションリーダー を考える（2）	本授業のまとめと振り返り	寺山 久美子	
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	なし			
参考文献	日本リハビリテーション 医学会監修	リハビリテーションと地域 連携・地域包括ケア	2013年	診断と治療社
事前・事後学修 留意事項	自分の居住するまたは勤務する地域をもとに「わがまちの又はわが勤務地の地域リハ」をリアルに 事前事後に調べ考えて欲しい。			
研究室	1号館 寺山研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MCS06-1R	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	地域支援学特論	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	共通科目		必修	2単位	前期(30h)
授業概要	<p>地域支援学特論では、地域が少子高齢化によって危機に瀕したと言われる現状を踏まえて、その「逆境」にこそ活路を見出そうとする。住民による工夫と連帯を通じて、地域が制度依存を脱し地域の課題の解決に貢献することも含まれる。これらの挑戦を担う人材を育成するために、リハビリテーション医療機関、NPO、社会福祉法人、行政など多様なセクターのマネジャー層にも教育の機会を提供する。本学教員に加え、地域再生に注目すべき成果を挙げている実務家たちの活動を良く知る外部講師も迎え、一体となって実践的な知識と技能を学修する科目である。</p>				
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 介護保険以前の地域課題を論ずることができる 2. 逆転の発想ができる 3. 住民主体の地域づくりを定義できる 4. 脱行政の発想ができる 5. 児童福祉と少子化をつなげて考えることができる 6. 工夫と連帯を解決につなげるアクターを探すことができる 				
授業回数	テーマ	内容			担当教員
1	地域ケア元年	介護保険以前の地域支援の歴史について1990年の広島・熊野町の取り組みを学修する。			古井 透
2	障害観と地域1	熊野町の取り組みから地域住民・高齢者の障害観について学修する。			古井 透
3	インクルーシブで持続可能な社会	その後の自験例などから、高齢者の障害観は変えられるのか、その可能性を学修する。			古井 透
4	住民主体の地域づくり1	住民主体の地域づくりの意義(海外との比較から)を学修する。			村川 浩一
5	住民主体の地域づくり(防災)	全国組織における調査研究から、地域防災における住民主体の地域づくりを学修する。			村川 浩一
6	住民主体の地域づくり(認知症)	認知症への初期対策における住民主体の地域づくり事例紹介を学修する。			村川 浩一
7	リーチアウトではなくリーチ・インについて	リハビリテーション医療機関、社会福祉法人の地域における貢献を学修する。			嶋野 広一
8	脱行政の当事者参画	アクセシビリティについての障害当事者参画による工夫と連帯を学修する。			古井 透・久利 彩子
9	少子化と児童福祉	少子化の進展と児童福祉について学修する。			野村 和樹
10	マネジャーが求められること	自助グループ、NPO、介護施設、行政など多様なセクターのマネジャーが求められることを学修する。			嶋野 広一
11	依存を脱し課題解決につなげるビジョン	産官学連携による認知症予防ボランティア養成講座の企画立案について学修する。			今岡 真和
12	住民による工夫と連帯をどう組織するか	産官学連携による認知症予防ボランティア養成講座の実施の経過化を学修する。			今岡 真和
13	工夫と連帯を解決につなげるアク	産官学連携による認知症予防の連帯を成長に			今岡 真和

	ター	つなげたアクターは誰なのかを学修する。		
14	キーパーソンになる	住民による工夫と連帯について、NPO、社会福祉法人、行政など多様なセクターのマネジャーの望むことを学修する。		
15	まとめ	学生からのフィードバックと質疑応答		
成績評価方法		最終講での発表内容(40%)と期末レポート(60%)にて評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	開講後に指定する			
参考文献				
事前・事後学修 留意事項	地域支援の経験を有することが望ましい。			
研究室	1号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSS05-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	地域社会福祉制度特論	担当教員 E-Mail	野村 和樹		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	<p>社会福祉における施策は法律を根拠として実施される。地域における社会福祉の様々な支援も同様である。社会福祉の制度にのっとり地域で展開される支援を地域社会福祉の制度とし学修を進める。社会福祉の施策に基づく支援により、基本的要求が充たされ尊厳の回復、健康で文化的な生活を取り戻すことも、社会的なリハビリテーションと捉えた学修を展開する。</p> <p>本科目においては、地域における支援の形態とその根拠となる法律に着目して学修を進めたい。まずは法律が制定される過程、そして、その法律を根拠として施行される施策を理解できるように、児童福祉の領域を取り上げ、児童福祉の根拠となる法律である児童福祉法の制定に遡り、児童福祉についての理解を深めたい。また、児童福祉法と身体障害者福祉法の関係、知的障害者福祉法制定との関わりを明らかにすることにより、障がい者福祉にも言及し、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援する法律により地域における支援の実際から地域リハビリテーションのあり方を学ぶ。</p> <p>次いで、『児童の権利に関する条約』を見ることにより、今日の児童の権利について学修したい。</p> <p>ある事象が社会問題として取り上げられ、それが人間の尊厳を脅かしたり、あるいは健康で文化的な最低限度の生活を営むための基本的要求が充たされない事態に陥るときに、それらの支援の施策として設けられた法制度の例として、児童虐待を取り上げて、事象の発生から社会問題に発展する経過、および施策の根拠となる『児童虐待の防止等に関する法律』が制定される過程を学修する。「児童虐待防止対策の抜本的強化」等に見られる「児童虐待防止対策を強化するための児童福祉法等の改正法」にあるように、実際の施策と根拠となる法律の関係を学ぶ。</p> <p>また、近年、子育て支援の施策として、子ども・子育て支援法が制定され、子育て世代包括支援センターが設けられているが、同センターでは、地域における子どもの育みに関わる問題の発見から、それを解決する支援の確立が求められている。本科目では、事例検討を通して、地域における施策のあり方を学修する。</p>				
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会福祉に関わる法律が制定された過程を理解できる 2. 権利に関わる国際法が制定された過程を理解ができる 3. 法律を根拠とした支援ならびに制度が理解できる 4. 制度を根拠とし、個々に応じた支援計画が立案できる 5. 事例を通して社会的リハビリテーションが理解できる 				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	『児童福祉法』 I	今日の日本における社会福祉のはじまりともいえる『児童福祉法』の成立過程について学ぶ		野村 和樹	
2	『児童福祉法』 II	『児童福祉法』の内容について学ぶ		野村 和樹	
3	『身体障害者福祉法』	『身体障害者福祉法』の成立過程について学ぶ		野村 和樹	
4	『知的障害者福祉法』	『知的障害者福祉法』の成立過程について学ぶ		野村 和樹	

5	児童福祉と障害者福祉	児童福祉と障害者福祉との関わりを明らかにし、『障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援する法律』を根拠として地域における支	野村 和樹	
6	『児童の権利条約』	『児童の権利条約』の成立過程について学ぶ	野村 和樹	
7	児童虐待防止法の制定Ⅰ イギリス産業革命と児童虐待防止法制定	イギリスにおいて1889年に制定された『児童虐待防止法』の背景について学ぶ	野村 和樹	
8	児童虐待防止法の制定Ⅱ 社会問題化から現行の『児童虐待の防止等に関する法律』の制定へ	今日の日本における児童虐待の現状を、資料を通して読み取る方法を学ぶ	野村 和樹	
9	『児童虐待の防止等に関する法律』と制度施策	『児童虐待防止法』から児童虐待の定義を理解し、児童虐待について学ぶ	野村 和樹	
10	『児童虐待の防止等に関する法律』と関連する法律	児童福祉に関わる法律から、被虐待児、個々に応じた様々な支援について学ぶ	野村 和樹	
11	『児童虐待の防止等に関する法律』等における支援	被虐待児に関わる支援について学ぶ	野村 和樹	
12	児童虐待に関わる施設と支援	施設退所後の自立支援の実際から、社会的リハビリテーションについて学ぶ	野村 和樹	
13	児童虐待に関する事例検討	児童虐待に関わる事例から、虐待による心身への影響を理解し、支援方法の立案について学ぶ	野村 和樹	
14	児童虐待予防のための包括的な支援	子育て世代包括支援センターと子ども子育て支援法に定められている「利用者支援事業」との関係を理解し、健やかな育ちの環境を学ぶ	野村 和樹	
15	総括	各回の講義を振り返ることで、法律を根拠とした支援の関係を学ぶ	野村 和樹	
成績評価方法	授業時に課す小レポート30%、最終レポート70%			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	授業内で適宜レジュメ、資料を配布			
参考文献	授業内で適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	配付された資料をクリティークし、知識の集積を行い、自分の考えをまとめる。			
研究室	1号館 野村研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSS06-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	地域ケアマネジメント特論	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	支持科目		選択	2単位	前期(30h)
授業概要	<p>2018年4月施行の社会福祉法の改正においては、高齢期のケアを念頭に置いた2025年を見据えた「地域包括ケアシステム」を深化させ、障がい者、子どもなどへの支援や複合的な課題にも広げた2040年を展望した「地域共生社会」へのシフトが明示されている。この地域共生社会の実現のために、「地域課題の解決力の強化」、「地域を基盤とする包括的支援の強化」、「地域丸ごとのつながりの強化」、「専門人材の機能強化、最大活用」が改革の骨格とされている。</p> <p>本科目では、個別ケースの自立支援に資するケアマネジメントの支援、支援困難事例などを通じた地域課題の発見、データを収集しエビデンスに基づく地域分析を行うことにより、地域の新たな資源開発や政策形成など、職種を問わず、保健医療福祉協働の実践力の向上を図り、地域共生社会に対応できるケアマネジメントの実践力を修得する。</p>				
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. ケアマネジメント実践のための理論が理解できる 2. ケアマネジメント実践のための評価方法・マネジメントプロセスが理解できる。 3. 地域共生社会に対応できるケアマネジメントについて理解できる 4. 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの概要について説明することができる。 5. 精神障害者が暮らしやすい地域づくりのための、リハビリテーション関連職種の役割を説明することができる。 6. 地域課題の解決のために地域に根差した社会資源を探り、活かす方法が理解できる 7. 当該地域の実情に合った地域特有のニーズを分析できる 				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	ケアマネジメントの定義と歴史 (アメリカ・イギリス)	ケアマネジメントの定義と成り立ちについて 歴史的背景より学ぶ		古井 透	
2	わが国における在宅福祉の展開と ケアマネジメントの導入	わが国における高齢者在宅福祉の展開と介護 保険制度の創設とその意義について学ぶ。		古井 透	
3	ケアマネジメントの構成要素と機能	ソーシャルワークとケアマネジメントの構成 要素と機能について学ぶ。		古井 透	
4	ケアマネジメントの方法と過程	介護保険におけるケアマネジメントの方法と 過程について学ぶ。		古井 透	
5	ケアマネジメントを可能にする地域 のネットワーク作り	多職種協働による自立支援に資するケアプラン の作成のためのスーパービジョンや、サービス 担当者会議、地域ケア会議によるネットワー ク作りについて学ぶ。		古井 透	
6	地域包括ケアシステムの実現に向け た地域ケア会議	地域ケア会議の5つの機能と、地域ケア個別会 議・地域ケア推進会議について学ぶ。		古井 透	
7	地域共生社会に向けた包括的支援	多機関・多職種の協働・連携と、住民参加による 新しい地域包括支援体制のビジョンについて 学ぶ。		古井 透	
8	精神保健医療福祉政策の動向	精神保健医療福祉に関する政策の動向について、 精神障害リハビリテーションに関連するもの を中心に学ぶ。		大類 淳矢	

9	精神障害者ケアマネジメントと精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムに向けての概要	精神保健医療福祉に関する政策の動向について、精神障害リハビリテーションに関連するものを中心に学ぶ。	大類 淳矢	
10	精神障害者ケアシステムの構築プロセスと構築に必要な要素	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた、国の取り組みやリハビリテーション職種の関与について学ぶ。	大類 淳矢	
11	障害者総合支援におけるケアマネジメント	障害者総合支援法に基づく支援方法を理解し、その活用の実際を学ぶ。	野村 和樹	
12	児童福祉とケアマネジメント	子ども子育て支援制度の概要を理解し、その実際例を学ぶ。	野村 和樹	
13	実践事例から学ぶ地域課題への先進的取り組み	先進的に取り組まれている事例を提示し、地域の特徴とそれに応じた支援を学ぶ。	野村 和樹	
14	実践事例から学ぶ個別ケアと地域分析	先行事例より、個別ケースの自立支援と地域の持つニーズを分析し、問題解決をはかる方法を学ぶ。	野村 和樹	
15	総括	地域共生社会に対応できるケアマネジメントについてのまとめとフィードバックを行う。	古井 透	
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じて配布または指定する			
参考文献	適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	次回の授業計画の範囲を予習し、討論に参加できるように準備をしてください。主体的参加を望みます。			
研究室	1号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSM03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	運動機能科学特別研究		担当教員 E-Mail	肥田 光正		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間	
	専門科目	運動機能科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論・演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。</p> <p>高齢者のフレイルや運動機能低下をもたしうる脊柱側弯、足趾アーチ変形など姿勢異常の定量的解析、地域在住高齢者のフレイルと口腔機能、慢性疼痛、抑うつ気分などが認知機能に及ぼす影響についての解析データを活用して研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1～3	研究課題の決定	運動機能科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			肥田 光正	
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			肥田 光正	
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			肥田 光正	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			肥田 光正	
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			肥田 光正	
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			肥田 光正	
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			肥田 光正	
22～28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			肥田 光正	

29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	肥田 光正
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	肥田 光正
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	肥田 光正
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	肥田 光正
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	肥田 光正
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	肥田 光正
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 肥田研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSM03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	運動機能科学特別研究		担当教員 E-Mail	中村 美砂		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論・演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。</p> <p>認知機能低下のメカニズムを運動科学的観点より理解し、認知予備力向上の戦略を確立することをゴールとする。培養細胞・疾患モデル動物・ヒトを対象として、形態学的、分子生物学的、疫学的手法を用いて認知機能と生体物質や運動機能等との関係について研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知・運動機能科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			中村 美砂	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			中村 美砂	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			中村 美砂	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			中村 美砂	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			中村 美砂	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			中村 美砂	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			中村 美砂	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			中村 美砂	
29~35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			中村 美砂	

36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	中村 美砂
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	中村 美砂
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	中村 美砂
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	中村 美砂
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	中村 美砂
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
参考文献			
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 中村研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSM03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	運動機能科学特別研究		担当教員 E-Mail	中尾 英俊		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論・演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。</p> <p>スポーツ障害の原因を研究課題とし、スポーツリハビリテーション並びに下肢変形モデルの課題について研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知・運動機能科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			中尾 英俊	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			中尾 英俊	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			中尾 英俊	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			中尾 英俊	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			中尾 英俊	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			中尾 英俊	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			中尾 英俊	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			中尾 英俊	
29~35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			中尾 英俊	
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			中尾 英俊	

37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	中尾 英俊
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	中尾 英俊
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	中尾 英俊
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	中尾 英俊
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	発行年		
参考文献	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 中尾研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSM03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	運動機能科学特別研究		担当教員 E-Mail	今岡 真和		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論・演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。</p> <p>地域在住高齢者のフレイル・サルコペニア調査について、地域高齢者の要支援・要介護リスク因子の検討について、骨粗鬆症1次予防に向けたリエゾンサービスの構築について、地域社会再生を取り上げ地域の人的リソースの活用方法に関する検討について、軽度認知機能障害(MCI)改善プログラムの開発について、ロコモティブシンドロームの関連要因についての横断調査について研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知・運動機能科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			今岡 真和	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			今岡 真和	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			今岡 真和	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			今岡 真和	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			今岡 真和	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			今岡 真和	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			今岡 真和	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			今岡 真和	

29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			今岡 真和
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			今岡 真和
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。			今岡 真和
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。			今岡 真和
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。			今岡 真和
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。			今岡 真和
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。				
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年	
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。				
参考文献					
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。				
研究室	1号館 今岡研究室	オフィスアワー	開講時に提示する		

科目No.	MSM03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	運動機能科学特別研究		担当教員 E-Mail	今井 亮太		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論・演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。</p> <p>高齢者や就労者が有する疼痛の病態メカニズムの検討、およびメカニズムに応じた評価方法の考案と治療の構築、筋骨格系疾患の疼痛や疼痛関連因子（不安、恐怖、破局的思考）と運動機能の関連性の検討、併せて疼痛患者が示す運動を客観的に定量化する手法、ならびに介入方法について研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1～3	研究課題の決定	認知・運動機能科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			今井 亮太	
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			今井 亮太	
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			今井 亮太	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			今井 亮太	
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			今井 亮太	
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			今井 亮太	
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			今井 亮太	
22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。			今井 亮太	
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			今井 亮太	

36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			今井 亮太
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。			今井 亮太
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。			今井 亮太
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。			今井 亮太
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。			今井 亮太
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。				
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年	
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。				
参考文献					
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。				
研究室	1号館 共同研究室	オフィスアワー	開講時に提示する		

科目No.	MSL03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	生活行為科学特別研究		担当教員 E-Mail	上島 健		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間	
	専門科目	生活行為科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>生活行為分析学、生活行為リハビリテーション特論・演習その他生活行為科学関連領域の授業を受けて、これらに関して研究の実践、指導を行い、リハビリテーション科学・作業療法学の立場から研究・論文作成を行う。</p> <p>陶芸、塗り絵、粘土などを用いた作業療法の有用性、住居環境が生活行為に及ぼす影響などの環境要因についての臨地・臨床データを収集・解析することにより、生活行為リハビリテーションの有用性を明らかにする研究と論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 生活行為科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 生活行為科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	生活行為科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			上島 健	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			上島 健	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			上島 健	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			上島 健	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			上島 健	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			上島 健	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			上島 健	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			上島 健	
29~35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			上島 健	
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			上島 健	

37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	上島 健
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	上島 健
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	上島 健
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	上島 健
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	発行年		
参考文献	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 上島研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSL03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	生活行為科学特別研究		担当教員 E-Mail	寺山 久美子		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間	
	専門科目	生活行為科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>生活行為分析学、生活行為リハビリテーション特論・演習その他生活行為科学関連領域の授業を受けて、これらに関して研究の実践、指導を行い、リハビリテーション科学・作業療法学の立場から研究・論文作成を行う。</p> <p>文献研究、調査研究、事例研究、介入研究等の手法を用いて、「地域における障害児・者、高齢者の生活行為の自立・自立支援促進」の課題の研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 生活行為科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 生活行為科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1～3	研究課題の決定	生活行為科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			寺山 久美子	
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			寺山 久美子	
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			寺山 久美子	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			寺山 久美子	
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			寺山 久美子	
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			寺山 久美子	
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			寺山 久美子	
22～28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			寺山 久美子	
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			寺山 久美子	
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			寺山 久美子	

37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	寺山 久美子
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	寺山 久美子
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	寺山 久美子
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	寺山 久美子
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	発行年		
参考文献	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 寺山研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSL03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	生活行為科学特別研究		担当教員 E-Mail	石川 健二		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>生活行為分析学、生活行為リハビリテーション特論・演習その他生活行為科学関連領域の授業を受けて、これらに関して研究の実践、指導を行い、リハビリテーション科学・作業療法学の立場から研究・論文作成を行う。</p> <p>障害者や高齢者の生活機能は、人的、物理的環境の作用に影響されている。様々な因子を考慮しながら実験研究の概要と手法の妥当性、信頼性の検討、サンプルサイズの見積もり方等、研究実施の基本を理解する。そのうえで、生活行為に関する脳・認知機能の分析や介入における課題を焦点化し、それらを解明するための研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 生活行為科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 生活行為科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	生活行為科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			石川 健二	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			石川 健二	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			石川 健二	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			石川 健二	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			石川 健二	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			石川 健二	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			石川 健二	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			石川 健二	
29~35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			石川 健二	
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			石川 健二	

37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	石川 健二
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	石川 健二
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	石川 健二
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	石川 健二
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	発行年		
参考文献	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 石川研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSL03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	生活行為科学特別研究		担当教員 E-Mail	武井 麻喜		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>生活行為分析学、生活行為リハビリテーション特論・演習その他生活行為科学関連領域の授業を受けて、これらに関して研究の実践、指導を行い、リハビリテーション科学・作業療法学の立場から研究・論文作成を行う。</p> <p>文献研究、調査研究、実験研究等の手法を用いて、生活行為マネジメントを実践することでの人の生活行為の向上(生きがい)に及ぼす効果などの課題の研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 生活行為科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 生活行為科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	生活行為科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			武井 麻喜	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			武井 麻喜	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			武井 麻喜	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			武井 麻喜	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			武井 麻喜	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			武井 麻喜	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			武井 麻喜	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			武井 麻喜	
29~35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			武井 麻喜	
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			武井 麻喜	
37~44	研究の実施(後半)	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。			武井 麻喜	

45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	武井 麻喜
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	武井 麻喜
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	武井 麻喜
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
参考文献			
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 武井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究		担当教員 E-Mail	武田 雅俊		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究方法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。</p> <p>認知機能低下に起因するコミュニケーション機能解析のための脳機能画像解析、脳波解析・精神神経薬理学的解析。分子遺伝学的解析法を用いて、認知・コミュニケーション機能についての研究・論文作成を行なう。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			武田 雅俊	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			武田 雅俊	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			武田 雅俊	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			武田 雅俊	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			武田 雅俊	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			武田 雅俊	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			武田 雅俊	

22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。	武田 雅俊
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	武田 雅俊
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	武田 雅俊
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	武田 雅俊
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	武田 雅俊
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	武田 雅俊
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	武田 雅俊
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
参考文献			
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究		担当教員 E-Mail	宇都宮 洋才		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間	
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究手法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。</p> <p>認知機能低下に起因するコミュニケーション機能低下に関わる機能性食品の作用解析・自然食品の中からサプリメントの抽出と分析などに関わる研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			宇都宮 洋才	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			宇都宮 洋才	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			宇都宮 洋才	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			宇都宮 洋才	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			宇都宮 洋才	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			宇都宮 洋才	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			宇都宮 洋才	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			宇都宮 洋才	

29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	宇都宮 洋才
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	宇都宮 洋才
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	宇都宮 洋才
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	宇都宮 洋才
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	宇都宮 洋才
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	宇都宮 洋才
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 宇都宮研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究		担当教員 E-Mail	坪田 裕司		
基本項目	科目区分		単位数		履修期間	
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究方法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。</p> <p>実験動物や培養神経細胞などを用いて、脳内シグナル分子や生理活性分子が認知機能やコミュニケーション機能に及ぼす影響を解析し、動物行動の社会性、細胞・細胞間相互作用などの知見を活用して、コミュニケーション機能を説明する生物学的本態を明らかにする研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			坪田 裕司	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			坪田 裕司	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			坪田 裕司	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			坪田 裕司	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			坪田 裕司	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			坪田 裕司	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			坪田 裕司	

22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。	坪田 裕司
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	坪田 裕司
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	坪田 裕司
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	坪田 裕司
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	坪田 裕司
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	坪田 裕司
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	坪田 裕司
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	発行年		
参考文献	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 坪田研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究		担当教員 E-Mail	芦塚 あおい		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域		選択必修	8単位	通年(120h)
授業概要	<p>本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究手法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。</p> <p>認知症患者におけるコミュニケーション・認知機能を取り上げ、認知症症状のリハビリテーションの課題について研究指導を行う。また、失語症・高次脳機能障害に関わるコミュニケーション機能領域においても研究対象とし、神経心理学、脳機能解析学などの研究手法を用いて研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			芦塚 あおい	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			芦塚 あおい	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			芦塚 あおい	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			芦塚 あおい	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			芦塚 あおい	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			芦塚 あおい	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			芦塚 あおい	

22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。	芦塚 あおい
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	芦塚 あおい
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	芦塚 あおい
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	芦塚 あおい
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	芦塚 あおい
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	芦塚 あおい
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	芦塚 あおい
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
参考文献			
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 芦塚研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究		担当教員 E-Mail	河野 良平		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	8単位	通年(120h)	
授業概要	<p>本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究手法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。</p> <p>認知機能低下とコミュニケーション機能障害に関する領域について、細胞生物学、蛋白・脂質物解析学、栄養学などの研究手法を用いて研究・論文作成を行う。</p>					
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。 					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1~3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			河野 良平	
4~8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			河野 良平	
9~11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			河野 良平	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			河野 良平	
13~14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			河野 良平	
15~16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			河野 良平	
17~21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			河野 良平	
22~28	研究の実施(前半)	研究計画に基づき、研究を行う。			河野 良平	

29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	河野 良平
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	河野 良平
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	河野 良平
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。	河野 良平
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	河野 良平
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	河野 良平
成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	発行年		
参考文献	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。		
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。		
研究室	1号館 河野研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

【資料 1 1】

成績評価方法（新旧対照表）

新	旧
<p>英語文献講読（2 ページ）</p> <p><u>グループワーク及びグループディスカッションの内容 50%</u></p> <p><u>論文発表の内容 50%</u></p>	<p>英語文献講読</p> <p><u>授業への参加、および到達目標達成度から総合的に評価する</u></p>
<p>リハビリテーション疫学・統計学特論（6 ページ）</p> <p><u>課題レポート(30%)と期末レポート(70%)により評価する。</u></p>	<p>リハビリテーション疫学・統計学特論</p> <p><u>主体的な参加の程度(30%)と期末レポート(70%)により総合的に評価する</u></p>
<p>認知機能・認知予備力特論（8 ページ）</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p>認知機能・認知予備力特論</p> <p><u>授業への参加状況(20%)、各授業科目における理解度・考察(40%)、筆記試験・レポートなど(40%)で総合的に評価する</u></p>
<p>地域リハビリテーションリーダー論（10 ページ）</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p>地域リハビリテーションリーダー論</p> <p><u>授業への参加状況(20%)、各授業科目における理解度・考察(40%)、筆記試験・レポートなど(40%)で総合的に評価する</u></p>
<p>地域支援学特論（12 ページ）</p> <p><u>最終講での発表内容(40%)と期末レポート(60%)にて評価する。</u></p>	<p>地域支援学特論</p> <p><u>最終講での発表内容と期末レポートにて評価する。</u></p>
<p>認知リハビリテーション学概論（14 ページ）</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総</u></p>	<p>認知リハビリテーション学概論</p> <p><u>授業への参加状況(20%)、各授業科目における理解度・考察(40%)、筆記試験・レポート</u></p>

<p><u>合的に評価する</u></p>	<p><u>など(40%)で総合的に評価する</u></p>
<p>認知リハビリテーション学研究方法論 (16 ページ) <u>筆記試験(50%)・レポート(50%)で評価する。</u></p>	<p>認知リハビリテーション学研究方法論 <u>授業への参加状況 (20%)、筆記試験・レポート (80%) などで総合的に評価する。</u></p>
<p>リハビリテーション教育学特論 (18 ページ) <u>課題レポート(50%)と課題について各担当教員の指示・提案に対する応答(50%)を総合的に評価する。</u></p>	<p>リハビリテーション教育学特論 <u>課題について各担当教員の指示・提案に対する応答、さらに授業への参加状況など総合的に評価する。</u></p>
<p>リハビリテーション教育学演習 (20 ページ) 成果物の発表内容(50%)および演習への<u>取組内容(50%)</u>によって<u>総合的に評価する。</u></p>	<p>リハビリテーション教育学演習 成果物の発表内容および演習への<u>貢献度</u>によって評価する</p>
<p><u>地域社会福祉制度特論 (22 ページ)</u> <u>授業時に課す小レポート 30%、最終レポート 70%</u></p>	<p>社会福祉制度特論 <u>授業への主体的な姿勢 20%、授業時に課す小レポート 20%、レポート 60%</u></p>
<p><u>地域ケアマネジメント特論 (24 ページ)</u> <u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p>ケアマネジメント特論 <u>発言等による講義への参加度、課題レポートの取り組み等により総合的に評価する。</u></p>
<p>心のサイエンスと臨床心理学 (26 ページ) <u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p>心のサイエンスと臨床心理学 <u>授業への参加状況(20%)、各授業科目における理解度・考察(40%)、筆記試験・レポートなど(40%)で総合的に評価する</u></p>

<p>認知機能解析学 (28 ページ)</p> <p>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</p>	<p>認知機能解析学</p> <p>出席状況、学修の積極性、課題発表、ディスカッションへの貢献度、レポートなどにより総合的に評価する。</p>
<p>運動機能解析学 (30 ページ)</p> <p>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</p>	<p>運動機能解析学</p> <p>運動機能解析学に関するレポート課題に対して評価する</p>
<p>生活行為解析学 (32 ページ)</p> <p>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</p>	<p>生活行為解析学</p> <p>レポート、授業での討論参加状況を加味して評価する。</p>
<p>コミュニケーション解析学 (34 ページ)</p> <p>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</p>	<p>コミュニケーション解析学</p> <p>各担当教員から出された課題についてのレポートの内容で評価する。</p>
<p>園芸療法補完代替医療 (36 ページ)</p> <p>演習への取組内容および発表(50%)と最終レジメ(50%)により評価する</p>	<p>園芸療法補完代替医療</p> <p>出席、参加態度、および発表と最終レジメにより評価する</p>
<p>運動機能リハビリテーション学特論 (40 ページ)</p> <p>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</p>	<p>認知・運動機能リハビリテーション学特論</p> <p>発言等による講義への参加度、課題レポートの取り組み等により総合的に評価する。</p>

<p><u>運動機能リハビリテーション学演習</u> (42 ページ)</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p><u>認知・運動機能リハビリテーション学演習</u></p> <p><u>講義・演習への取り組み、課題レポート、発表の内容等により総合的に評価する</u></p>
<p><u>生活行為リハビリテーション学特論</u> (54 ページ)</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p><u>認知・生活行為リハビリテーション学特論</u></p> <p><u>レポート、授業での討論参加状況を加味して評価する。</u></p>
<p><u>生活行為リハビリテーション学演習</u> (56 ページ)</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p><u>認知・生活行為リハビリテーション学演習</u></p> <p><u>レポート、授業での討論参加状況を加味して評価する</u></p>
<p><u>コミュニケーションリハビリテーション学特論</u> (66 ページ)</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p><u>認知・コミュニケーションリハビリテーション学特論</u></p> <p><u>授業態度 (ディスカッションへの参加度や内容など) や成果物 (レポート等) をもとに到達目標の達成度を総合的に評価する。</u></p>
<p><u>コミュニケーションリハビリテーション学演習</u> (68 ページ)</p> <p><u>各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する</u></p>	<p><u>認知・コミュニケーションリハビリテーション学演習</u></p> <p><u>授業態度 (ディスカッションへの参加度や内容など) や成果物 (レポート等) をもとに到達目標の達成度を総合的に評価する。</u></p>

【資料12】 補正後

研究計画書審査基準、論文審査基準及び最終試験基準

研究計画書審査基準

研究の具体的な方法、内容の研究計画についての「研究計画書」を、指導教員の指導のもとに作成し、2名の審査委員が審査を行う。研究指導計画は必要に応じて柔軟に見直しを行う。

評価項目

1. 研究領域における研究背景の理解
先行研究や関連研究に関する文献・情報の収集が十分行われている。
研究課題における問題設定が明確に提示されている。
2. 研究課題の新規性および社会的有用性
研究課題が新規性、独創性、社会的有用性を有している。
3. 適切な研究方法の設定
研究目的を遂行するために適切な研究方法（実験方法、調査方法、解析方法など）が採用されている。
4. 研究スケジュールの実行可能性
研究の諸条件もしくは予備調査結果等 などからみて、研究期間内に十分に遂行できるスケジュールが立てられている。
5. 研究倫理の配慮
研究対象者やデータの取り扱いなどに倫理的配慮が明文化されている。

論文審査基準

審査体制

学位論文の審査は、主査1名と副査2名の合議で行う。

評価項目

1. 研究領域における研究背景の理解
先行研究や関連研究に関する文献・情報の収集が十分行われている。
研究課題における問題設定が明確に提示されている。
2. 研究課題の新規性および社会的有用性

研究課題が新規性、独創性、社会的有用性を有している。

3. 適切な研究方法の設定

研究目的を遂行するために適切な研究方法（実験方法、調査方法、解析方法など）が採用されている。

4. 適切な研究結果の提示

研究目的を達成するための必要なデータが十分に収集できている。

データを適切に分析できている。

結果を適切な表、グラフなどで提示できている。

5. 研究結果に基づいた考察

結果の解釈が客観的になされている。

6. 一貫した論理構成

研究課題に対する論理展開に整合性が認められる。

得られた結果と必要十分な文献にもとづいた深い考察ができている。

7. 整えられた体裁

論文が既定の様式に沿っている。

参考文献の引用が適切になされている。

8. 研究倫理の遵守

研究倫理審査委員会で承認されており、研究対象者やデータの取り扱いなどに十分な倫理的配慮がなされている。

9. その他

査読付きの学術誌に掲載されるレベルにある。

学位論文審査委員の構成及び選定方法

審査委員会は、教授または准教授 2 人以上を含む研究科の教員をもって組織し、主査 1 名及び 副査 2 名をおく。ただし、少なくとも教授 1 人を含めなければならない。研究科教授会において審査のため必要があると認めるときは、調査委員を委託することができる。審査委員の選定及び調査委員の委託は、学位論文提出者の所属する領域から推薦のあった審査委員及び調査委員候補者について、研究科教授会が行う。

最終試験基準

審査体制

最終試験は、所定の単位を修得し、かつ、修士論文を提出した者につき、当該修士論文を中心とした学位審査研究発表会における発表と質疑応答、さらに非公開の審査委員会による口頭又は筆答による試験により判定する。

評価項目

1. 修士論文に関連する専門的知識と豊かな見識、倫理観を身につけていることが認められること。
2. 発表用資料が適切に提示されており、質疑に対して誠実な応答が認められること。
3. 修士論文の研究内容を学術誌に公表または公表を予定していることが認められること。
4. 独創的なりハビリテーション研究を企画し、推進する能力が認められること。
5. 審査委員会による口頭又は筆答による試験に合格すること。

【資料12】 補正前

研究計画書審査基準、論文審査基準及び最終試験基準

研究計画書審査基準

研究の具体的な方法、内容の研究計画についての「研究計画書」を、指導教員の指導のもとに作成し、2名の審査委員が審査を行う。研究指導計画は必要に応じて柔軟に見直しを行う。

評価項目

6. 研究領域における研究背景の理解

先行研究や関連研究に関する文献・情報の収集が十分行われている。
研究課題における問題設定が明確に提示されている。

7. 研究課題の新規性および社会的有用性

研究課題が新規性、独創性、社会的有用性を有している。

8. 適切な研究方法の設定

研究目的を遂行するために適切な研究方法（実験方法、調査方法、解析方法など）が採用されている。

9. 研究スケジュールの実行可能性

研究の諸条件もしくは予備調査結果等 などからみて、研究期間内に十分に遂行できるスケジュールが立てられている。

10. 研究倫理の配慮

研究対象者やデータの取り扱いなどに倫理的配慮が明文化されている。

論文審査基準

審査体制

学位論文の審査は、主査1名と副査2名以上の合議で行う。

評価項目

1. 研究領域における研究背景の理解

先行研究や関連研究に関する文献・情報の収集が十分行われている。
研究課題における問題設定が明確に提示されている。

2. 研究課題の新規性および社会的有用性

研究課題が新規性、独創性、社会的有用性を有している。

3. 適切な研究方法の設定

研究目的を遂行するために適切な研究方法（実験方法、調査方法、解析方法など）が採用されている。

4. 適切な研究結果の提示

研究目的を達成するための必要なデータが十分に収集できている。

データを適切に分析できている。

結果を適切な表、グラフなどで提示できている。

5. 研究結果に基づいた考察

結果の解釈が客観的になされている。

6. 一貫した論理構成

研究課題に対する論理展開に整合性が認められる。

得られた結果と必要十分な文献にもとづいた深い考察ができている。

7. 整えられた体裁

論文が既定の様式に沿っている。

参考文献の引用が適切になされている。

8. 研究倫理の遵守

研究倫理審査委員会で承認されており、研究対象者やデータの取り扱いなどに十分な倫理的配慮がなされている。

9. その他

査読付きの学術誌に掲載されるレベルにある。

最終試験基準

審査体制

最終試験は、所定の単位を修得し、かつ、修士論文を提出した者につき、当該修士論文を中心とした学位審査研究発表会における発表と質疑応答、さらに非公開の審査委員会による口頭又は筆答による試験により判定する。

評価項目

6. 修士論文に関連する専門的知識と豊かな見識、倫理観を身につけていることが認められること。
7. 発表用資料が適切に提示されており、質疑に対して誠実な応答が認められること。
8. 修士論文の研究内容を学術誌に公表または公表を予定していることが認められること。
9. 独創的なリハビリテーション研究を企画し、推進する能力が認められること。
10. 審査委員会による口頭又は筆答による試験に合格すること。

履修指導及び研究指導の方法・スケジュール

【資料13】

補正後

リハビリテーション研究科 リハビリテーション学専攻（各領域共通）

時 期		学 生	指 導 教 員	研 究 科 委 員 会 等		
1 年 次	前 期	4月	入学ガイダンス 履修計画書作成・届出 共通科目・支持科目・専門科目の履修 研究課題の決定 〈研究テーマの明確化〉	履修指導 特別研究の指導		
		5月	〈関連文献の考察〉			
		6月				
		7月	〈研究の方向性・全体像の明確化〉			
		8月	研究計画書の立案・作成			
		9月	研究計画の発表及び評価		研究計画書の審査	
	後 期	10月	共通科目・支持科目・専門科目の履修 研究計画の修正	特別研究の指導		
		11月	研究倫理申請書の作成		研究倫理審査委員会の審査	
		12月	予備研究等の実施			
		1月	研究の実施			
		2月				
		3月	2年次ガイダンス			
2 年 次	前 期	4月		特別研究の指導		
		5月				
		6月				
		7月	研究の中間まとめ			
		8月	研究の中間発表、研究の実施			
		9月				
	後 期	10月		特別研究の指導		
		11月	研究結果のまとめ			
		12月	論文作成			
		1月	修士論文提出			
		2月				修士論文審査
						合否判定
			〈修士論文発表会〉			
3月	最終試験		修了判定			
			修了式			

履修指導及び研究指導の方法・スケジュール

【資料13】

リハビリテーション研究科 認知リハビリテーション学専攻 (各領域共通)

補正前

時 期		学 生	指 導 教 員	研 究 科 委 員 会 等		
1 年 次	前 期	4月	入学ガイダンス 履修計画書作成・届出 共通科目・支持科目・専門科目の履修 研究課題の決定 〈研究テーマの明確化〉	履修指導 特別研究の指導		
		5月				
		6月	〈関連文献の考察〉			
		7月				
		8月	〈研究の方向性・全体像の明確化〉			
		9月				
	後 期	10月	共通科目・支持科目・専門科目の履修 研究計画の立案	特別研究の指導		
		11月	研究計画書の作成			
		12月	研究計画の発表及び評価			
		1月	研究計画書の修正		研究計画書の審査	
		2月	研究倫理申請書の作成			
		3月	2年次ガイダンス		研究倫理審査委員会の審査	
2 年 次	前 期	4月	予備研究等の実施 研究の実施	特別研究の指導		
		5月				
		6月				
		7月	研究の中間まとめ			
		8月	研究の中間発表、研究の実施			
		9月				
	後 期	10月		特別研究の指導		
		11月	研究結果のまとめ			
		12月	論文作成			
		1月	修士論文提出			
		2月				修士論文審査
						合否判定
					〈修士論文発表会〉	
				最終試験		修了判定
		3月			修了式	

購入予定図書・電子媒体資料一覧

【資料14】
補正後

和書

計55冊

	書籍名	著者	出版社	ISBN	出版年
1	発達障害のリハビリテーション 多職種アプローチの実践	宮尾益知	医学書院	9784260028462	2017
2	特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン わかりやすい診断手順と支援の実践 / 特異的発達障害の臨床診断と治療指針	特異的発達障害の臨床診断と治療指針作成に関する研究チーム	診断と治療社	9784787817815	2010
3	脳からわかる発達障害 多様な脳・多様な発達・多様な学び	鳥居深雪著	中央法規出版	9784805881743	2020
4	ここに目をつける!脳波判読ナビ	飛松省三	南山堂	9784525225414	2016
5	脳波所見をどう読むか 92症例の臨床現場から	東間正人	新興医学出版社	9784880027081	2010
6	脳波の行間を読む デジタル脳波判読術	飛松省三	南山堂	9784525225810	2019
7	小児脳波 判読のためのアプローチ	小林勝弘	診断と治療社	9784787816771	2008
8	心理学のための事象関連電位ガイドブック	入野野宏	北大路書房	9784762824623	2005
9	よくわかる 言語学	窪園晴夫	ミネルヴァ書房	9784623086740	2019
10	よくわかる 臨床発達心理学	麻生武	ミネルヴァ書房	9784623063260	2012
11	よくわかる 臨床心理学	下山晴彦	ミネルヴァ書房	9784623054350	2009
12	よくわかる 地域包括ケア	隅田好美	ミネルヴァ書房	9784623082933	2018
13	よくわかる 発達心理学	無藤隆	ミネルヴァ書房	9784623053797	2009
14	よくわかる コミュニケーション学	板場良久	ミネルヴァ書房	9784623059577	2011
15	口唇裂口蓋裂の総合治療 成長に応じた諸問題の解決	森口隆彦	克誠堂出版	9784771902695	2003
16	よくわかる 子どものための形成外科	中島竜夫	永井書店	9784815917180	2005
17	リハビリテーション医学・医療 Q & A	リハビリテーション医学会	医学書院	978-4260038195	2018
18	リハビリテーション医学・医療用語集	リハビリテーション医学会	医学書院	978-4830627408	2019
19	教師がまとめる研究論文(量的研究・質的研究・アクションリサーチ)	スーザン・ウォレス(著)三輪建二(訳)	鳳書房	978-4902455441	2020
20	SPSSによる統計処理の手順 第9版	石村 貞夫 他	東京図書	978-4489023545	2021
21	SPSSによるアンケート調査のための統計処理	石村 貞夫 他	東京図書	978-4489022814	2018
22	細胞の分子生物学 第6版	ALBERTS(著)他、中村桂子(翻訳)他	ニュートンプレス	978-4315520620	2017
23	細胞培養実習テキスト 第2版	日本組織培養学会	じほう	978-4840752923	2020
24	精神疾患のバイオマーカー	中村 純(編集)	星和書店	978-4791108954	2015
25	日常臨床からみた認知症診療と脳画像検査 その意義と限界	川畑信也	南山堂	978-4525247812	2011
26	研究の育て方: ゴールとプロセスの「見える化」	近藤 克則	医学書院	978-4260036740	2018
27	健康・スポーツ科学のための卒業論文/修士論文の書き方	出村 慎一 他	杏林書院	978-4764411623	2015
28	ロコモティブシンドロームのすべて(日本医師会生涯教育シリーズ)	中村 耕三他	診断と治療社	978-4787821942	2015
29	健康・老化・寿命一人ひとりのちの文化誌	黒木 登志夫	中央公論新社	978-4121018984	2007
30	基礎からわかる軽度認知障害(MCI): 効果的な認知症予防を目指して	島田 裕之	医学書院	978-4260020800	2015
31	シリーズ進化生物学の新潮流 老化という生存戦略 NBS	近藤 祥司	日本評論社	978-4535806542	2015
32	高次脳機能の神経科学とニューロリハビリテーション	森岡 周	協同医書出版社	978-4763910899	2020
33	運動学習の脳・神経科学—その基礎から臨床まで	大築 立志	市村出版	978-4902109535	2020
34	若返るクラゲ 老いないネズミ 老化する人間	ジョシュ・ミッテルドルフ他	集英社インターナショナル	978-4797673548	2018
35	生命科学の実験デザイン[第4版]	G・D・ラクストン	名古屋大学出版会	978-4815809508	2019
36	PT・OT・STのための認知行動療法ガイドブック—リハビリテーションの効果を高める	大嶋伸雄(著)	中央法規出版	978-4805852323	2015
37	認知神経リハビリテーション入門	カルロ ベルフェッティ(著)、小池美納(翻訳)	協同医書出版社	978-4763910783	2016
38	認知リハビリテーション VOL.25 NO.1 2020	認知リハビリテーション研究会	新興医学出版社	978-4880027937	2020
39	認知症の知的障害者への支援	木下 大成	ミネルヴァ書房	978-4623089857	2020
40	一般企業への重度精神障害者の就職をどう支援していくか	片山 優美子	ミネルヴァ書房	978-4623086627	2020
41	精神障害のある人への地域を基盤とした支援	平澤 恵美	ミネルヴァ書房	978-4623086054	2019
42	子ども虐待防止支援の実証分析	栗山 直子	ミネルヴァ書房	978-4623088508	2020

	書籍名	著者	出版社	ISBN	出版年
43	ソーシャルワークにおける「生活場モデル」の構築	空閑 浩人	ミネルヴァ書房	978-462307148	2014
44	地域を基盤としたソーシャルワークの展開	川島 ゆり子	ミネルヴァ書房	978-4623060801	2011
45	ソーシャルワークにおけるアドボカシー	小西 加保留	ミネルヴァ書房	978-462304973	2007
46	社会福祉学事典	日本社会福祉学会 事典編集委員会	丸善出版	978-4621088142	2014
47	家族	T. パーソンズ, R.F. ベールズ	黎明書房	978-4654016815	2001
48	いやされない傷	友田 明美	診断と治療社	978-4787819123	2011
49	子どものPTSD=診断と治療-	友田 明美, 杉山 登志郎, 谷池 雅子 (編集)	診断と治療社	978-4787821027	2014
50	SPSSによる分散分析と多重比較の手順 第5版	石村 貞夫 他	東京図書	978-4489022043	2015
51	超簡単!!研究倫理審査と申請 ~ 適正な臨床・疫学研究推進に向けて ~	飯島 久志 他	薬事日報社	978-4840814331	2018
52	医学・生命科学の研究倫理ハンドブック		東京大学出版会	978-4130624138	2015
53	老化生物学 老いと寿命のメカニズム	近藤祥司 (翻訳)	メディカルサイエンス	978-4895928274	2015
54	運動による脳の制御—認知症予防のための運動	島田 裕之	杏林書院	978-4764400719	2015
55	健康・スポーツ科学のための調査研究法	山下秋二他	杏林書院	978-4764411500	2014

洋書

計25冊

	書籍名	著者	出版社	ISBN	出版年
1	Cognitive Reserve: Theory and Applications (Studies on Neuropsychology, Neurology and Cognition)	Yaakov Stern (編集)	Psychology Press	978-1841694740	2007
2	Cognitive Changes and the Aging Brain	ケネス・M・ヒールマン, ステファニ・ナドー	Cambridge University Press	978-1108453608	2019
3	Aging Mechanisms: Longevity, Metabolism, and Brain Aging	Nozomu Mori (Editor), Inhee Mook-Jung (Editor)	Springer Japan	978-4431566885	2019
4	Molecular Mechanisms of Dementia: Biomarkers, Neurochemistry, and Therapy	Akhlaq Farooqui	Elsevier	978-0128163474	2013
5	The Biological Basis of Mental Health	William T. Blows (著)	Routledge	978-1138900615	2016
6	Sex Differences in Neurology and Psychiatry (Volume 175)	Rupert Lanzenberger, Georg S. Kranz, Ivanka Savic	Elsevier	978-0444641236	2020
7	The Paraneuron	Tsuneo Fujita (著)	Springer	978-4431680680	2013
8	Exercise for Frail Elders	Elizabeth Best-Martini and Kim A. Jones-DiGenova	Goodwill of the Heartland	978-1450416092	2014
9	A Comprehensive Guide to Rehabilitation 4TH	O'Hanlon, Shane	Elsevier	978-0702080166	2021
10	Geriatric Physical Therapy 4rd Edition	Andrew A. Guccione	elsevier	978-0323609128	2019
11	Synapse Therapeutic Learning Theory Stress Cognition Chronic pain Neuromuscular rehabilitation: Applied Neuroscience Education Health Sport Everyday life Brain and spinal cord repotentialtion	Oscar Otero Victoria (著), Ingrid Johana Otero Muriel (著), Joan Sebastián Otero Muriel (著)	Independently published	979-8649776745	2020
12	Traumatic Brain Injury : A Clinician's Guide to Diagnosis, Management, and Rehabilitation 2ND HRD 135 p.	Tsao, Jack W. (EDT)	Springer	978-3030224356	2019
13	Cognitive Approaches in Neuropsychological Rehabilitation(Psychology Library Editions: Neuropsychology)	Seron, Xavier (EDT) / Deloche, Gerard (EDT)	Taylor & Francis	978-1138594999	2020
14	A Relational Approach to Rehabilitation : Thinking about Relationships after Brain Injury	Bowen, Ceri / Palmer, Siobhan / Yeates, Giles	Routledge	978-0367106621	2019
15	Neuropsychological Tools for Dementia: Differential Diagnosis and Treatment	Helmut Hildebrandt (Author)	Academic Press	978-0128210727	2020
16	Cognitive Rehabilitation of Memory: A Clinical-Neuropsychological Introduction	Helmut Hildebrandt	Academic Press	978-0128169810	2019
17	Neuropsychology for Occupational Therapists: Cognition in Occupational Performance, 4th Edition	June Grieve, Linda Gnanasekaran	Wiley-Blackwell	978-1405136990	2017
18	Cognitive Rehabilitation and Neuroimaging:Examining the Evidence from Brain to Behavior	John DeLuca (編集), Nancy D. Chiaravalloti (編集), Erica Weber (編集)	Springer	978-3030483814	2020
19	Practical Handbook of Synapsisterapeutics Learning Theory Stress Cognition Chronic Pain Neuromuscular Rehabilitation Repowering the Brain and Spinal Medulla: Applied Neuroscience in Education Health Sports Daily Life	Oscar Otero Victoria (著), Ingrid Johana Otero Muriel (著), Joan Sebastián Otero Muriel (著)	Independently published	979-8651919406	2020
20	Virtual Reality in Health and Rehabilitation	Christopher M. Hayre (編集), Dave J. Muller (編集), Marcia J. Scherer (編集)	CRC Press	978-1000319972	2021
21	Cognitive Stimulation Therapy for Dementia (Aging and Mental Health Research)	Lauren A. Yates (編集)	Routledge	978-0367362713	2019
22	Cognitive-Behavioral Therapy for Adult Asperger Syndrome (Guides to Individualized Evidence Based Treatment Series)	Valerie Gaus (著)	Guilford Pubn	978-1593854973	2007
23	Cognitive Neuroscience	Marie T. Banich (著), Rebecca J. Compton (著)	Cambridge University Press	978-1107158443	2018
24	Handbook on the neuropsychology of aging and dementia (Clinical Handbooks in Neuropsychology)	Lisa D. Ravdin (Editor), Heather L. Katzen (Editor)	Springer	978-1461491408	2019
25	Cognitive rehabilitation for pediatric neurological disorders	Gianna Locascio (Author)	Cambridge University Press	978-1316633113	2018

	タイトル	出版	ISSN
1	Journal of Bone and Joint Surgery 【OJ】	JBJS	0021-9355
2	Journal of Applied physiology 【OJ】	American Physiological Society (APS)	8750-7587
3	Ear and Hearing 【OJ】	LWW	0196-0202
4	Foot and Ankle International 【OJ】	Wiley-Blackwell	1071-1007
5	Journal of Prosthetics and Orthotics(JPO) 【OJ】	Springer	1534-6331
6	Neuropediatrics 【OJ】	Elsevier	0174-304X
7	Physical Therapy 【OJ】	AOTA	0915-5287

【参考】契約中の電子ジャーナル

	タイトル	出版	ISSN
1	American Journal of Occupational Therapy	AMERICAN OCCUPATIONAL THERAPY	0272-9490
2	Australian Occupational Therapy Journal	Wiley-Blackwell on behalf of the Occupational Therapy Australia	1440-1630
3	Canadian Journal of Occupational Therapy	Sage Publications	1911-9828
4	American Journal of sports medicine	Sage Publications	1552-3365
5	Dysphagia	Springer Science+Business Media	1432-0460
6	Journal of Speech, Language, and Hearing Research	American Speech-Language-Hearing Association	1558-9102
7	メディカルオンライン	*	*

* 本学配信対象ジャーナル数：1,423誌

(学会誌 1,093誌、商業誌 330誌)

購入予定図書・電子媒体資料一覧

【資料14】
補正前

和書

計55冊

	書籍名	著者	出版社	ISBN	出版年
1	発達障害のリハビリテーション 多職種アプローチの実際	宮尾益知	医学書院	9784260028462	2017
2	特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン わかりやすい診断手順と支援の実際 / 特異的発達障害の臨床診断と治療指針	特異的発達障害の臨床診断と治療指針作成に関する研究チーム	診断と治療社	9784787817815	2010
3	脳からわかる発達障害 多様な脳・多様な発達・多様な学び	鳥居深雪著	中央法規出版	9784805881743	2020
4	ここに目をつける!脳波判読ナビ	飛松省三	南山堂	9784525225414	2016
5	脳波所見をどう読むか 92症例の臨床現場から	東間正人	新興医学出版社	9784880027081	2010
6	脳波の行間を読む デジタル脳波判読術	飛松省三	南山堂	9784525225810	2019
7	小児脳波 判読のためのアプローチ	小林勝弘	診断と治療社	9784787816771	2008
8	心理学のための事象関連電位ガイドブック	入野野宏	北大路書房	9784762824623	2005
9	よくわかる 言語学	窪園晴夫	ミネルヴァ書房	9784623086740	2019
10	よくわかる 臨床発達心理学	麻生武	ミネルヴァ書房	9784623063260	2012
11	よくわかる 臨床心理学	下山晴彦	ミネルヴァ書房	9784623054350	2009
12	よくわかる 地域包括ケア	隅田好美	ミネルヴァ書房	9784623082933	2018
13	よくわかる 発達心理学	無藤隆	ミネルヴァ書房	9784623053797	2009
14	よくわかる コミュニケーション学	板場良久	ミネルヴァ書房	9784623059577	2011
15	口唇裂口蓋裂の総合治療 成長に応じた諸問題の解決	森口隆彦	克誠堂出版	9784771902695	2003
16	よくわかる 子どものための形成外科	中島竜夫	永井書店	9784815917180	2005
17	リハビリテーション医学・医療 Q & A	リハビリテーション医学会	医学書院	978-4260038195	2018
18	リハビリテーション医学・医療用語集	リハビリテーション医学会	医学書院	978-4830627408	2019
19	質的研究と量的研究のエビデンスの統合:ヘルスケアにおける研究・実践・政策への活用	キャサリン・ボープ他、伊藤 景二、北素子(監訳)	医学書院	978-4260009508	2009
20	SPSSによる統計処理の手順 第9版	石村 貞夫 他	東京図書	978-4489023545	2021
21	SPSSによるアンケート調査のための統計処理	石村 貞夫 他	東京図書	978-4489022814	2018
22	細胞の分子生物学 第6版	ALBERTS(著)他、中村桂子(翻訳)他	ニュートンプレス	978-4315520620	2017
23	細胞培養実習テキスト 第2版	日本組織培養学会	じほう	978-4840752923	2020
24	精神疾患のバイオマーカー	中村 純(編集)	星和書店	978-4791108954	2015
25	日常臨床からみた認知症診療と脳画像検査 その意義と限界	川畑信也	南山堂	978-4525247812	2011
26	研究の育て方:ゴールとプロセスの「見える化」	近藤 克則	医学書院	978-4260036740	2018
27	健康・スポーツ科学のための卒業論文/修士論文の書き方	出村 慎一 他	杏林書院	978-4764411623	2015
28	ロコモティブシンドロームのすべて(日本医師会生涯教育シリーズ)	中村 耕三他	診断と治療社	978-4787821942	2015
29	健康・老化・寿命一人ひとりのちの文化誌	黒木 登志夫	中央公論新社	978-4121018984	2007
30	基礎からわかる軽度認知障害(MCI):効果的な認知症予防を目指して	島田 裕之	医学書院	978-4260020800	2015
31	シリーズ進化生物学の新潮流 老化という生存戦略 NBS	近藤 祥司	日本評論社	978-4535806542	2015
32	高次脳機能の神経科学とニューロリハビリテーション	森岡 周	協同医書出版社	978-4763910899	2020
33	運動学習の脳・神経科学—その基礎から臨床まで	大築 立志	市村出版	978-4902109535	2020
34	若返るクラゲ 老いないネズミ 老化する人間	ジョシュ・ミッテルドルフ他	集英社インターナショナル	978-4797673548	2018
35	生命科学の実験デザイン[第4版]	G・D・ラクストン	名古屋大学出版会	978-4815809508	2019
36	PT・OT・STのための認知行動療法ガイドブック—リハビリテーションの効果を高める	大嶋伸雄(著)	中央法規出版	978-4805852323	2015
37	認知神経リハビリテーション入門	カルロ ベルフェッティ(著)、小池美納(翻訳)	協同医書出版社	978-4763910783	2016
38	認知リハビリテーション VOL.25 NO.1 2020	認知リハビリテーション研究会	新興医学出版社	978-4880027937	2020
39	認知症の知的障害者への支援	木下 大成	ミネルヴァ書房	978-4623089857	2020
40	一般企業への重度精神障害者の就職をどう支援していくか	片山 優美子	ミネルヴァ書房	978-4623086627	2020
41	精神障害のある人への地域を基盤とした支援	平澤 恵美	ミネルヴァ書房	978-4623086054	2019
42	子ども虐待防止支援の実証分析	栗山 直子	ミネルヴァ書房	978-4623088508	2020

	書籍名	著者	出版社	ISBN	出版年
43	ソーシャルワークにおける「生活場モデル」の構築	空閑 浩人	ミネルヴァ書房	978-462307148	2014
44	地域を基盤としたソーシャルワークの展開	川島 ゆり子	ミネルヴァ書房	978-4623060801	2011
45	ソーシャルワークにおけるアドボカシー	小西 加保留	ミネルヴァ書房	978-462304973	2007
46	社会福祉学事典	日本社会福祉学会 事典編集委員会	丸善出版	978-4621088142	2014
47	家族	T. パーソンズ, R.F. ベールズ	黎明書房	978-4654016815	2001
48	いやされない傷	友田 明美	診断と治療社	978-4787819123	2011
49	子どものPTSD=診断と治療-	友田 明美, 杉山 登志郎, 谷池 雅子 (編集)	診断と治療社	978-4787821027	2014
50	SPSSによる分散分析と多重比較の手順 第5版	石村 貞夫 他	東京図書	978-4489022043	2015
51	超簡単!!研究倫理審査と申請 ~ 適正な臨床・疫学研究推進に向けて ~	飯島 久志 他	薬事日報社	978-4840814331	2018
52	医学・生命科学の研究倫理ハンドブック		東京大学出版会	978-4130624138	2015
53	老化生物学 老いと寿命のメカニズム	近藤祥司 (翻訳)	メディカルサイエンス	978-4895928274	2015
54	運動による脳の制御—認知症予防のための運動	島田 裕之	杏林書院	978-4764400719	2015
55	健康・スポーツ科学のための調査研究法	山下秋二他	杏林書院	978-4764411500	2014

洋書

計25冊

	書籍名	著者	出版社	ISBN	出版年
1	Cognitive Reserve: Theory and Applications (Studies on Neuropsychology, Neurology and Cognition)	Yaakov Stern (編集)	Psychology Press	978-1841694740	2007
2	Cognitive Changes and the Aging Brain	ケネス・M・ヒールマン, ステファニ・ナドー	Cambridge University Press	978-1108453608	2019
3	Aging Mechanisms: Longevity, Metabolism, and Brain Aging	Nozomu Mori (Editor), Inhee Mook-Jung (Editor)	Springer Japan	978-4431566885	2019
4	Molecular Mechanisms of Dementia: Biomarkers, Neurochemistry, and Therapy	Akhlaq Farooqui	Elsevier	978-0128163474	2013
5	The Biological Basis of Mental Health	William T. Blows (著)	Routledge	978-1138900615	2016
6	Sex Differences in Neurology and Psychiatry (Volume 175)	Rupert Lanzenberger, Georg S. Kranz, Ivanka Savic	Elsevier	978-0444641236	2020
7	The Paraneuron	Tsuneo Fujita (著)	Springer	978-4431680680	2013
8	Exercise for Frail Elders	Elizabeth Best-Martini and Kim A. Jones-DiGenova	Goodwill of the Heartland	978-1450416092	2014
9	A Comprehensive Guide to Geriatric Rehabilitation: [previously entitled Geriatric Rehabilitation Manual] 3rd Edition	Timothy L. Kauffman PhD PT (Editor)	Churchill Livingstone	978-0702045882	2014
10	Geriatric Physical Therapy 4rd Edition	Andrew A. Guccione	elsever	978-0323609128	2019
11	Synapse Therapeutic Learning Theory Stress Cognition Chronic pain Neuromuscular rehabilitation: Applied Neuroscience Education Health Sport Everyday life Brain and spinal cord repotentiatio	Oscar Otero Victoria (著), Ingrid Johana Otero Muriel (著), Joan Sebastián Otero Muriel (著)	Independently published	979-8649776745	2020
12	Neuropsychological Rehabilitation: Theory and Practice	Barbara A. Wilson	CRC Press	978-9026519512	2003
13	Optimizing Cognitive Rehabilitation: Effective Instructional Methods Illustrated Edition	McKay Moore Sohlberg (Author), Lyn S. Turkstra (Author), Barbara A. Wilson (Foreword)	Guilford Press	978-1609182007	2011
14	Rehabilitation of Visual Disorders After Brain Injury: 2nd Edition (Neuropsychological Rehabilitation: A Modular Handbook)	Josef Zihl	Psychology Press	978-1848720060	2010
15	Neuropsychological Tools for Dementia: Differential Diagnosis and Treatment	Helmut Hildebrandt (Author)	Academic Press	978-0128210727	2020
16	Cognitive Rehabilitation of Memory: A Clinical-Neuropsychological Introduction	Helmut Hildebrandt	Academic Press	978-0128169810	2019
17	Neuropsychology for Occupational Therapists: Cognition in Occupational Performance, 4th Edition	June Grieve, Linda Gnanasekaran	Wiley-Blackwell	978-1405136990	2017
18	Cognitive Rehabilitation and Neuroimaging:Examining the Evidence from Brain to Behavior	John DeLuca (編集), Nancy D. Chiaravalloti (編集), Erica Weber (編集)	Springer	978-3030483814	2020
19	Practical Handbook of Synapsisterapeutics Learning Theory Stress Cognition Chronic Pain Neuromuscular Rehabilitation Repowering the Brain and Spinal Medulla: Applied Neuroscience in Education Health Sports Daily Life	Oscar Otero Victoria (著), Ingrid Johana Otero Muriel (著), Joan Sebastián Otero Muriel (著)	Independently published	979-8651919406	2020
20	Virtual Reality in Health and Rehabilitation	Christopher M. Hayre (編集), Dave J. Muller (編集), Marcia J. Scherer (編集)	CRC Press	978-1000319972	2021
21	Cognitive Stimulation Therapy for Dementia (Aging and Mental Health Research)	Lauren A. Yates (編集)	Routledge	978-0367362713	2019
22	Cognitive-Behavioral Therapy for Adult Asperger Syndrome (Guides to Individualized Evidence Based Treatment Series)	Valerie Gaus (著)	Guilford Pubn	978-1593854973	2007
23	Cognitive Neuroscience	Marie T. Banich (著), Rebecca J. Compton (著)	Cambridge University Press	978-1107158443	2018
24	Handbook on the neuropsychology of aging and dementia (Clinical Handbooks in Neuropsychology)	Lisa D. Ravdin (Editor), Heather L. Katzen (Editor)	Springer	978-1461491408	2019
25	Cognitive rehabilitation for pediatric neurological disorders	Gianna Locascio (Author)	Cambridge University Press	978-1316633113	2018

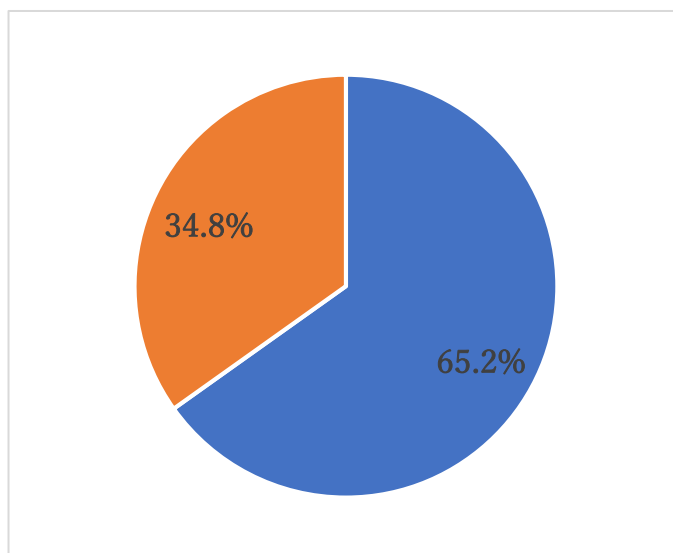
	タイトル	出版	ISSN
1	Journal of Bone and Joint Surgery	JBJS	0021-9355
2	Journal of Applied physiology 【OJ】	American Physiological Society (APS)	8750-7587
3	Ear and Hearing 【OJ】	LWW	0196-0202

対象者	2021年度在學生（1～4年生） （理学療法学専攻、作業療法学専攻、言語聴覚学専攻）
調査期間	2021年6月
調査方法	Webアンケート（Microsoft Forms を利用）
回答者数	287名（対象者416名）回収率69.0%

【アンケート結果】

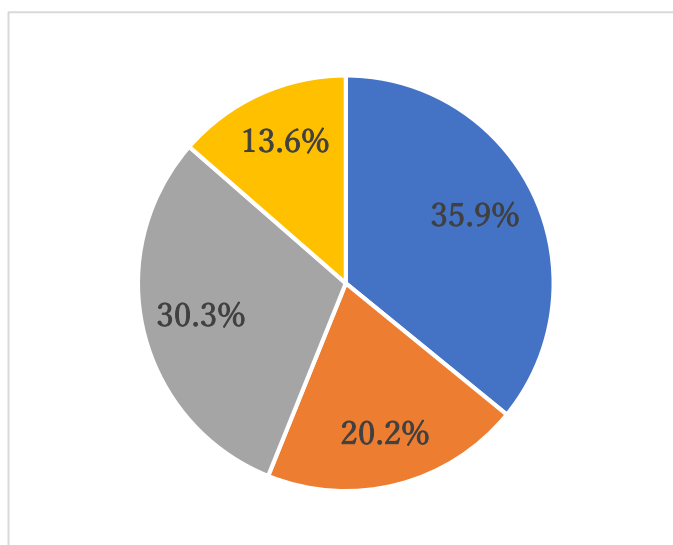
1. 性別

■ ① 男	187	65.2%
■ ② 女	100	34.8%
計	287	



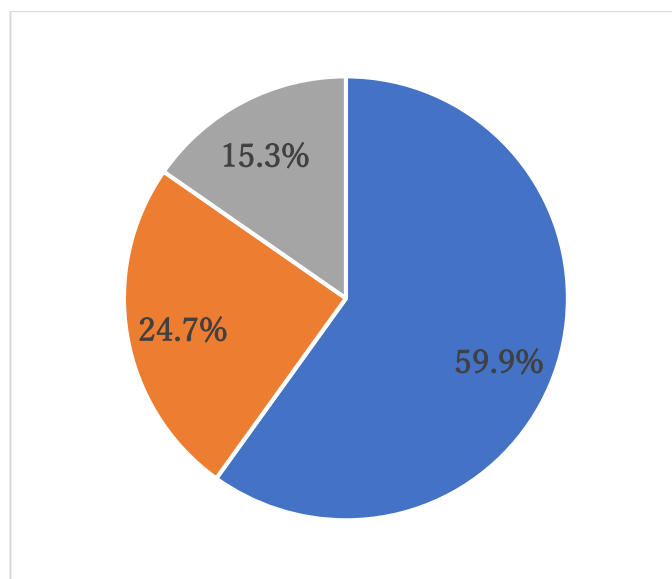
2. 学年について

■ ① 1年	103	35.9%
■ ② 2年	58	20.2%
■ ③ 3年	87	30.3%
■ ④ 4年	39	13.6%
計	287	



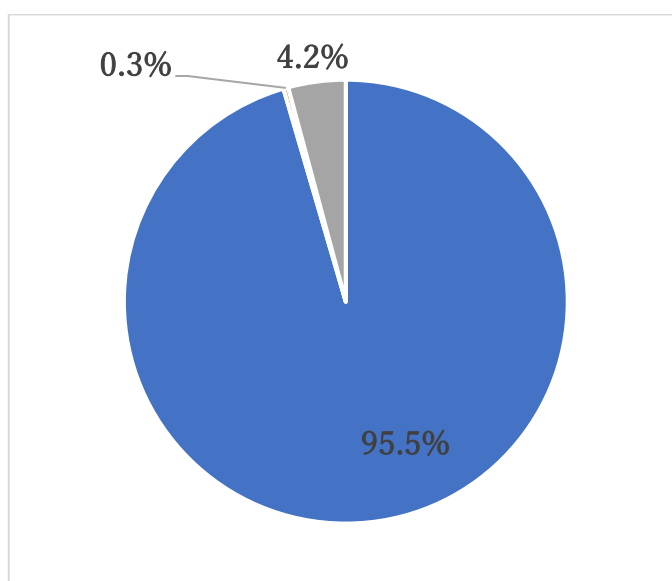
3. 専攻について

■ ① 理学	172	59.9%
■ ② 作業	71	24.7%
■ ③ 言語	44	15.3%
計	287	



4. 設問 3 で①～④を選んだ方への質問です。下記より理由を選んでください。

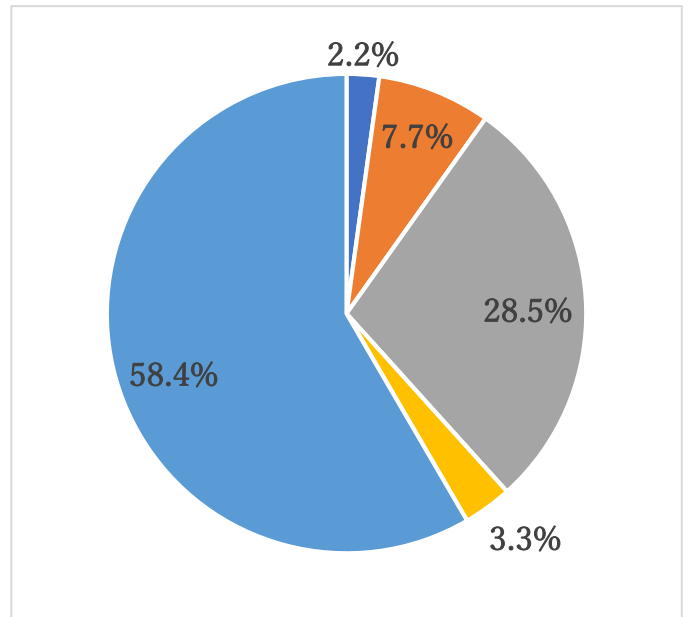
■ ① 就職を希望する	274	95.5%
■ ② 大学院進学を希望する	1	0.3%
■ ③ その他	12	4.2%
計	287	



5. 設問 4 で「就職を希望する」を選んだ方への質問です。 将来、社会人を対象とした大学院への進学希

望はありますか？

■ ① ぜひ進学したい	6	2.2%
■ ② 機会があれば進学したい	21	7.7%
■ ③ 社会に出て必要を感じた場合には進学したい	78	28.5%
■ ④ 夜間や土日など仕事と勉学が両立できれば進学を考える	9	3.3%
■ ⑤ 進学は考えていない	160	58.4%
計	274	

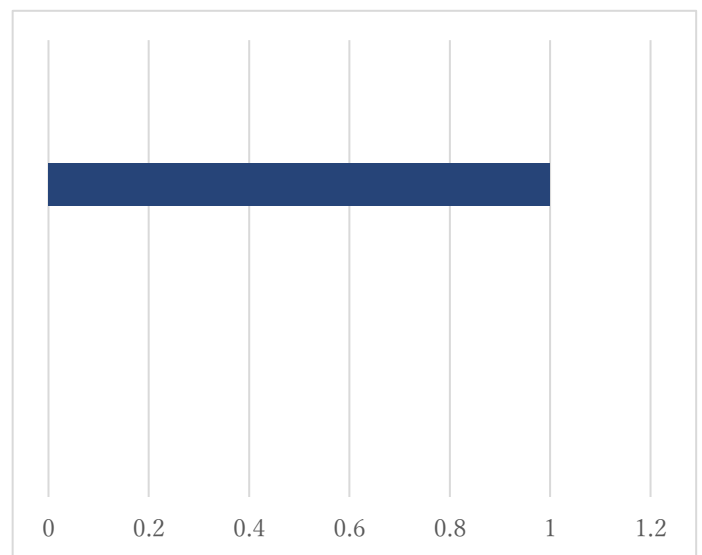


6. 設問 4 で「大学院を希望する」を選んだ方への質問です。 下記より理由を選んでください（複数回答

可）。

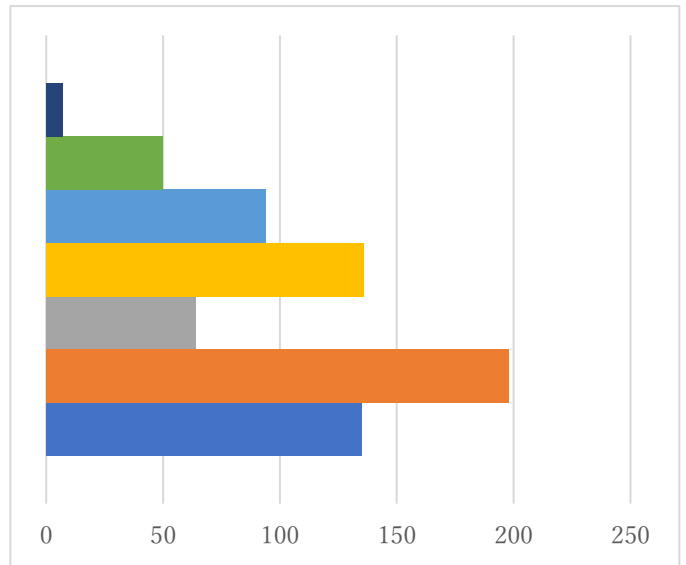
- ① 研究に取り組み、専門性を深めたいから
- ② 高度専門職業人として知識・技術を身につけたいから
- ③ 研究機関などでの研究職に就きたいから
- ④ 大学等の教員になりたいから
- ⑤ 就職に有利になるから
- ⑥ 学部卒業後に就きたいと思う職業が明確でないから
- ⑦ 学位（修士号）が欲しいから
- ⑧ 周りに勧められたから
- ⑨ その他

計 1



7. 大学院に進学する場合、重視することは何ですか？（複数回答可）

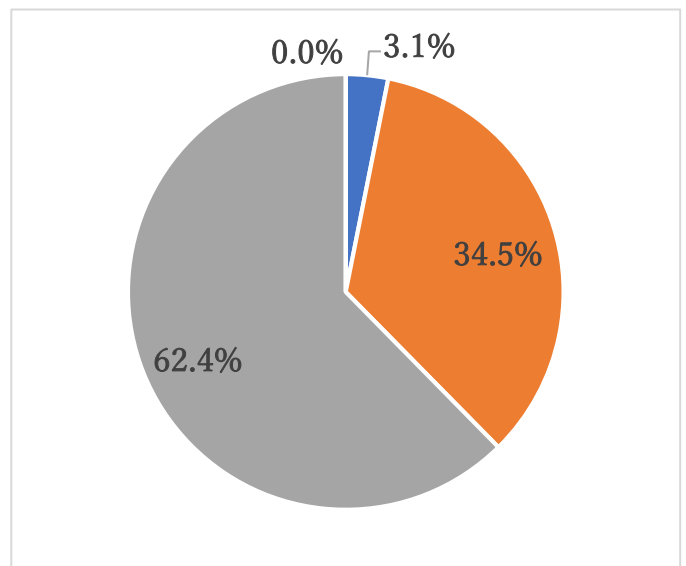
■ ① 研究・指導内容	135
■ ② 学費	198
■ ③ 奨学金制度	64
■ ④ 資格	136
■ ⑤ 施設・環境	94
■ ⑥ 通学等の利便性	50
■ ⑦ その他	7
計	684



8. 大阪河崎リハビリテーション大学大学院認知リハビリテーション科学専攻（修士）が開設されるとしたら、興味・関心はありますか？

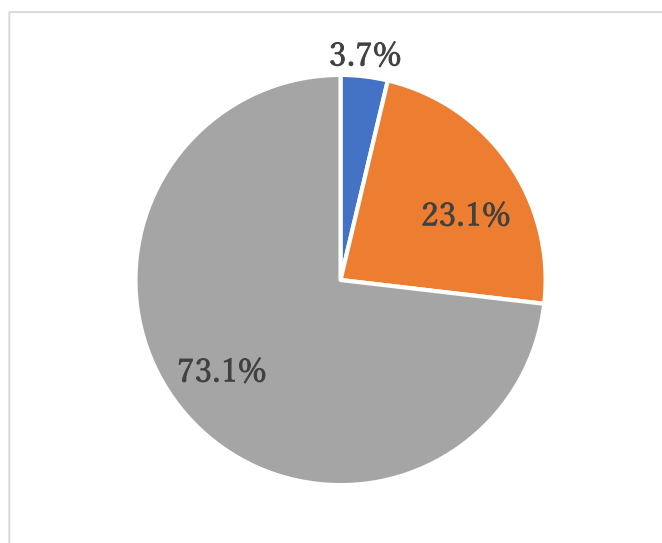
ら、興味・関心はありますか？

■ ① 大いにある	9	3.1%
■ ② ある	99	34.5%
■ ③ ない	179	62.4%
■ ④ 未回答	0	0.0%
計	287	



9. 設問 8 で①および②を選ばれた方への質問です。

■ ① ぜひ進学したい	4	3.7%
■ ② 進学したい	25	23.1%
■ ③ 進学は考えていない	79	73.1%
計	108	



10. その他、自由に記載してください。

- ・大学院は考えていません！ 就職に行こうと思っています。
- ・通学時間が長い。
- ・実家からとなると遠いから。
- ・奨学金があるので就職希望です
- ・就職はしたいです
- ・勉強がついて行けないと感じた
- ・大学院で学べる範囲がどのようなものなのかが気になります
- ・大学院について考えてみようと思った
- ・今は就職を考えていますが、今後4年間を経て学びたいと思えば進学を視野にいれたいと思います。
- ・機会があれば進学してみたいです
- ・大学院について知れました
- ・大学院に行くメリットはありますか？
- ・大学ががんばります。
- ・行く気ないです
- ・ありがとうございました。
- ・大学院って何するですか。お金もらえますか。
- ・まだよく分からないからです
- ・よろしくをお願いします
- ・大学院と大学の違いを簡潔に知りたい
- ・大学院に進学したら大変そう
- ・大学院ではどのようなことを行われるのですか？
- ・社会に出て必要と感じれば進学したい感じです。
- ・留学について気になった
- ・正直あまり大学院がどおゆうものか分からない。
- ・大学院についていまち理解ができていない。
- ・大学院ができれば話だけでも聞きたいです
- ・大学院に進学するにあたり奨学金制度を利用できるか知りたいです
- ・お金の余裕がない為奨学金を借りている。これ以上お金はかけてられない
- ・まだ大学院について考えていません。
- ・学費を払うことが難しく、大学院でどのようなことを行うのか具体的にわからないので大学院への進学は考えていません。
- ・大学院について、そもそもあまり理解できていない。
- ・正直、大学院に全く興味がないです。自分達へのプラスになることが無さすぎます
- ・就職したいです
- ・がんばります
- ・就職活動の説明会などは興味があります。
- ・大学院について調べておきます
- ・卒業できるように頑張ります
- ・大学院ではどのような勉強をするのか知りたい
- ・まだ、一階生なので大学院の事はこれから考えようと思っています。
- ・大学院が設立されるのは凄いことだと思う。
- ・頑張ります
- ・まだあんまり将来のことについて想像できていません。
- ・授業がわからない。
- ・私は大学院は反対です。
- ・よろしくをお願いします
- ・大学院への進学をあまり考えていないため

- ・今のところ大学院への進学については未定です。
- ・金銭面の問題から反対します
- ・就職しか考えていません。
- ・まだ、分からないことが多いから
- ・現時点では特に療法士の資格以外に就職する上で他の資格の必要性を考えていないので時間や学費、資格等を考慮しながら自身のスキルアップ等の目的で必要に応じて検討したい。
- ・大学院ができれば、色々なことができるし、もっと深く研究とかできると思うのでいいなと思います。
- ・学生でまだ現場に多く携わっていないので、まだ特に大学院への進学の必要性を感じれないため、現状は進学の意味はないです
- ・就職を希望しているので考えたことはないです。
- ・勉強頑張ります
- ・主に近場での就職を考えています。
- ・興味が無いから
- ・金銭的にこれ以上は迷惑をかけられない
- ・進学は考えていません。
- ・まずは就職を考えてます
- ・機会があれば行きたいと思います。
- ・頑張ってください。
- ・私は反対したいと思います。
- ・少しだけ興味があります。
- ・私は、作業療法を第一として考えているので気にはなりますが、進学しようとは考えていません。
- ・まだ大学院に行きたいと思っていないからです。
- ・就職を考えているので大学院は考えていません。
- ・興味ないです
- ・大学院がなにかよく分かりません
- ・就職するので考えていません。
- ・頑張ります
- ・社会に出て、必要だと感じた研究を集中して行えたらいいなと思います。
- ・興味が無いです
- ・お金をもっと別の使い方に回してください
- ・大学院は具体的に何をやるんですか
- ・まだ将来は分かりません
- ・就職一択
- ・学費は重要になると思います。
- ・学費のことが1番気になります
- ・今のところ特に大学院への進学は考えていません。
- ・大学院に興味はあります。
- ・今すぐ進学は考えていませんが興味はあります。
- ・院に興味はありますが、現在お借りしている奨学金の返済の目途が立たなければ厳しい状況です。

大阪河崎リハビリテーション大学大学院設置計画に関するアンケート調査

本学では、現在のリハビリテーション学部の教育内容を深化させた新たな大学院リハビリテーション学研究科（修士課程）の設置計画を進めております。

このアンケート調査は、在学生の皆様への大学院への進学希望についてお聞きし、大学院設置のための基礎資料とするものです。結果は、統計的に処理され、大学院設置申請資料としてのみ用いるものとし、個人にご迷惑をおかけすることは一切ございません。何卒、ご協力を宜しくお願い致します。

大学院設置計画

1. 名称 大阪河崎リハビリテーション大学大学院リハビリテーション学研究科
2. 開設時期 令和4(2022)年4月
3. 修業年限 2年
4. 専攻 リハビリテーション学専攻
5. 定員 入学定員8名/収容定員16名
6. 授与する学位 修士（リハビリテーション学）
7. 所在地 大阪府貝塚市水間158
8. 修了要件 2年以上在学し、32単位以上を修得し、修士論文審査に合格すること。
9. 学費 入学検定料：3万円

入学金：30万円

授業料：授業料 年60万円、教育充実費 年14万5千円

10. 応募条件 大学を卒業した者等

11. 設置の理念

リハビリテーション専門職は、リハビリテーションチームのキーパーソンとなり、患者および対象者の潜在能力を最大限に引き出し、機能回復や生活機能改善を図るための高度な臨床能力と、多職種専門家との連携調整能力が求められ、同時に患者や家族のニーズの多様性に柔軟に対応する卓越したコミュニケーション能力が求められるようになり、さらに地域住民への介入による疾患予防が求められるようになっている。このような状況を踏まえて、本学にリハビリテーション学研究科を設置して、地域のリーダーとして活躍できるリハビリテーション専門職を養成する。

12. 養成する人物像

リハビリテーション学分野における高度医療専門職として、予防リハビリテーションと地域リハビリテーションの発展に寄与することができる。

リハビリテーション学分野における幅広い学識と倫理観を有し、地域もしくは臨床の場で、チームリーダーとしての役割を果たすことができる。

教育・研究者として、修得した専門能力と研究能力を教育研究に活かし、リハビリテーション学の発展に寄与することができる。

13. 有職者に対する特別な配慮

- ・本学研究科では、有職のため、昼間だけでは学修が困難と予測される学生のために、大学院設置基準第14条の規定を適用して、平日のVI～VII時限（18：00～19：30）と土曜日I～V時限（09：00～17：50）の授業も行います。
- ・修業年限は2年のところ、有職者等には3年間で修了する長期履修制度を採用します。納付金

についても、2年間分を3年間で納める制度を考えています。

・学部の経済支援制度に準じた制度を大学院にも適用し、学費面での就学支援を積極的に行う予定です。また、本研究科の大学院生の経済的支援のために、本学と密接な協力関係にある医療グループの「河崎グループ奨学資金制度」を実施する予定です。

[参考] 大阪府下の同分野の大学院・研究科の名称

- ・大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科
- ・大阪電気通信大学大学院 医療福祉工学研究科
- ・関西医療大学大学院 保健医療学研究科
- ・森ノ宮医療大学大学院 保健医療学研究科
- ・大阪保健医療大学大学院 保健医療学研究科

14. アンケート調査期間

令和3年6月7日(月)～13日(日)

* 必須

1. 性別について *

- 男
- 女

2. 学年について *

- 4年
- 3年
- 2年
- 1年

3. 専攻について *

- 理学
- 作業
- 言語

4. 本学卒業後の進路についての質問です。 *

- 就職を希望する
- 大学院進学を希望する
- その他

5. 設問 4で「就職を希望する」を選んだ方への質問です。 将来、社会人を対象とした大学院への進学希望はありますか？ *

- ぜひ進学したい
- 機会があれば進学したい
- 社会に出て必要を感じた場合には進学したい
- 夜間や土日など仕事と勉学を両立できれば進学を考える
- 進学は考えていない

6. 設問 4で「大学院を希望する」を選んだ方への質問です。 下記より理由を選んでください（複数回答可）。 *

- 研究に取り組み、専門性を深めたいから
- 高度専門職業人として知識・技術を身につけたいから
- 研究機関などでの研究職に就きたいから
- 大学等の教員になりたいから
- 就職に有利になるから
- 学部卒業後に就きたいと思う職業が明確でないから
- 学位（修士号）が欲しいから
- 周りに勧められたから
- その他

7. 大学院に進学する場合、重視することは何ですか？（複数回答可） *

研究・指導内容

学費

奨学金制度

資格

施設・環境

通学等の利便性

その他

8. 大阪河崎リハビリテーション大学大学院リハビリテーション研究科リハビリテーション学専攻（修士）が開設されるとしたら、興味・関心はありますか？ *

大いにある

ある

ない

9. 前の質問において興味・関心が「大いにある」、「ある」を選ばれた方への質問です。 *

ぜひ進学したい

進学したい

進学は考えていない

10. その他、自由に記載してください。 *

このコンテンツは Microsoft によって作成または承認されたものではありません。送信したデータはフォームの所有者に送信されます。

 Microsoft Forms